スペイン語音素論（その七）

中和批判

原　誠

中和という概念は言語学者のあいだでまだ一致した賛同を得ていない．Bazell, 1956 によると大きくまとめて五つの反対が数えられるという．

その第一は本概念が心理主義に堕しているということである．これに対して Bazell はこの概念がその他の音素論上の理論と平行して発展したために一時“心理主義的”時期を経過したことはたしかだが，それは単に歴史上の一事件に過ぎないと反論している．筆者もこの反論には賛成である．また中和の概念の中には何ら心理主義的なものを見出すことはできない．

第二の反対は中和がレベルの混同に基づいているということである．この反対に対する Bazell の反論は以下の如くである．

> ‥‥中和という概念はほかでもないレベルの混同を排除せんとして考え出されたものである．たとえばある言語において有声子音と無声子音の対立は語末で消失するというのは音素論上の一事実である．これに反し，ドイツ語における hund-/hunt，ロシヤ語における rod-/rot といった変化を形態論上有意味としたむかしの考えはたしかにレベルの混同を犯していた．もちろんこういった特殊なレベルの混同は今日あらゆる言語学派において排除されてしまった‥‥(p. 25)

筆者としては中和がレベルの混同を避けるためにこそ生れて来たとする説は首肯し難いが，相当の注意を払って実際に適用する限り，中和はレベルを混同しているとはいえないと思う．

Bazell は中和が形態論に及ぼす相異なる影響に基づいて中和を解釈する三つの方法を想定している．

（i）中和というものはすべて余剰と考えることができる．この解釈は Jakobson, Fant & Halle, 1952 の pp. 44—45 において採用されている．たとえばロシヤ語の velosiped（自転車）の末尾の子音は三つの余剰特徴を有している．すなわち「閉鎖音」という同時的特徴が三つのうちの二つを有し（「口音」と「子音」），語末という位置が第三の「無声」という特徴を有している．

（ii）第二の解釈は Trubetzkoy のそれで，対立というものはすべてプラスの極とマイナ

スの極とから成り，後者は単に前者を欠いたものとするものである．

J. Cantineau によってフランス語に訳された Trubetzkoy, 1939 の "notes autobiographique" (p. xxvii) において Jakobson が支持しているこの解釈は，Jakobson, Fant & Halle, 1952 においては諸特徴を示すためのプラスとマイナスの記号選択によって具体化されている．

ではいったいぜんたいマイナスの特徴とはけっきょく一つの特徴なのかそれともその欠如なのか？　マイナスの特徴を単に特徴の欠如と考えるならば余剰はあり得ない．もしも無声（たとえばロシヤ語の語末における）が特徴でないとすれば，余剰特徴とはいったい何であるか？

けっきょく特徴の単なる欠如を余剰と記述するのは矛盾であるから，ロシヤ語やドイツ語の語末破裂子音の無声性は余剰的ではないということになる．通常余剰とは一特徴の無意味な顕在ということである．ここでもう一つの困難が生ずる．Jakobson, Fant & Halle, 1952 にあってはすべての余剰特徴がマイナス記号によって指示されているわけではない．大部分はそのように指示されているとはいえ例外がある．たとえば，「母音」というプラス特徴は velosiped の最終音節の母音にあっては余剰的であるとしてカッコの中に入れられている（いかなる子音もこの位置には現われ得ないから）．他の位置において「子音」特徴が余剰的であるからといって，「母音」特徴を対立のマイナス極とみなすのも妥当な解決とはいえまい．従って中和を特徴の抹消とみなせばこの種の余剰は中和とみなされないことにもなる．この抹消はどうも恣意的な感じがする．

(iii)　また中和の起る位置における特徴は音素論のレベルではすべて無関係とみなすこともできなくはない．この第三の解釈も問題がある，だからこそもちろんのことながら Bazell は唯一の正しい解決としてそれを擁護することは考えていない．彼がいいたいのはそれが論理的には弁護可能だということである．しかし依然としてそれが有用かどうかを疑い続け，その結果この問題は音素論だけを孤立させて考える限り解決されないと結論している．

「一つのレベルを他から完全に孤立させてみても何の益もない．常に文法の他の部門に対する何らかの論及の効果をも考慮すべきである．」という Halle, 1954 の言に筆者は賛成する．われわれの分析は音素論的分析に終るのではなく，当該言語全体の粗漏なき記述を目指している．全体の分析によってのみ分析結果の良悪を判定すべきである．この意味において，孤立した音素論の見地からは同じ程度に適正ないくつかの解決の中にどれ一つとして決定的なものがない時は，ひょっとして音素論的事象を記述する決定的方法が得られるかも知れないから，形態論的事象を考慮してもよいということになる．

当然のことながら，Bazell は中和の解釈が文法の他の部門に与える効果を考慮して，三つの解釈のそれぞれについて有効なばあいと無効なばあいとを指摘している．

（i） 中和は多くのばあい積極的にも消極的にも形態論的記述とは何ら関係がない，つまり中和の処理の仕方によってより高いレベルの文法記述が簡易化したり複雑化したりすることはない．ヨーロッパの大部分の言語における母音の口音か鼻音かの対立の中和を例にとろう（英語のように母音がふつう口音であろうと，ルーマニヤ語のように鼻音的異音を有していようとそれは構わない）． このばあいは第三の解釈を推奨できる．これらの言語の体系にあっては母音が口音であるか鼻音であるかは問題にならないのである．

（ii） 中和は多くのばあい形態論上の記述と積極的に関係している，つまり音素論のレベルにおいて中和を考慮した際の失敗は形態論上の記述の複雑化を招来したり，音素と形態素との橋渡しをするために設けられ，別の方法によれば不必要な「形態音素論」の分野を設定せざるを得なくなったりする．このばあいには第二の解釈を推奨できる．「有声」（声門の振動）という特徴は（ロシヤ語，ドイツ語，トルコ語において）語末の位置において消失すると述べるだけで十分であり，音素論から形態論へ移る際も何らの追記をする必要もない．

(iii) 中和は多くのばあい形態論上の記述と消極的に関係している，いいかえれば音素論のレベルにおいて中和を考慮することによって形態論上の諸関係を明快にせずにむしろ混濁させてしまうことがある．ギリシヤ語における語末の /m/ と /n/ との対立の中和を例にとろう．同一の形態が語末と語中に現われる時には /m/ は決して末尾の要素として現われないから，この対立はいかなる形態論上の変化をも起さない．このばあいには第一の解釈を採択し，語末の子音は他の位置におけるとまったく同じ構成の諸特徴を有していると考えるのが適当であろう．

けっきょく Bazell の結論は中和には「レベルの混同はない」ということであり，われわれもこれに賛意を表するしだいである．

スペイン語のばあいには幸いなことに形態論に気をまわす必要はない．なぜならばスペイン語において起る可能性のある中和は積極的にも消極的にも形態論上の記述とは何の関係もないから，つまり中和の処理方法によってより高いレベルの文法記述が簡単になったり，複雑になったりすることはないからであって，このことは先に進むに従って自明の理となって来る．大切なことは，ある対立における相対する両項はある環境においては意味をなさないということを述べたあとであればわれわれはただ単に音声的実体を尊重しさえすればよいということである．

このようにして中和に対する二つの反対論が論破されてしまった．第三の反対は，同一の音に対してはその現われる環境がどこであろうと常に同一の音素論的解釈が与えられねばならないという原則に基づいている．もちろんこのこと自体は中和に関する問題ではない．しかし音素どうしの交叉に対しての反対は中和に対してなされる反対に等しいのである．

上記の原則から導き出される系は次の二つである．

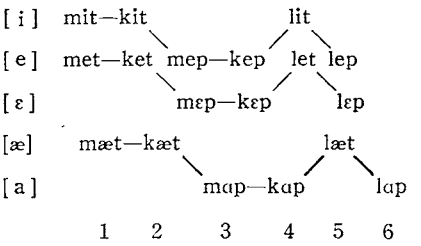
(i) いかなる音も相異なる環境にあっては相異なる音素に属することはできない.

(ii) いかなる音もある環境では音素論的意義をもち，他の環境ではそれを持たないというわけにはいかない.

この原則は Jakobson, Fant & Halle, 1952 において，しかも元来この問題について述べてはいない一節 (p. 5) において拒否されている (のちに Jakobson & Halle, 1956, p. 14 においても). そこではデンマーク語の [d] 音は強い位置 (ふつう語頭) では音素 /d/ の異音として，また弱い位置では音素 /t/ の異音として解釈されている. これは明らかに音素どうしの交叉の一例である.

ここでわれわれは少からず道草を喰って音素どうしの交叉について考えてみたい. Fischer-Jørgensen, 1949 は一言語には以下のような“交換可能な”語が存在すると仮定している.

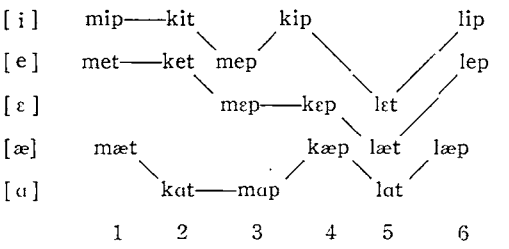
第 1 図



これらの母音からいったいいくつの音素が設定されるであろうか？ もしそれらの音声的性質に注目するなら，/i, e, ɛ, æ, ɑ/ の五つを設定することが可能であろう. しかし縦の六列 (1, 2, 3, ····) については三つ以上の音が対立しているような列は一つもない. 従って諸単語を図のように線で結んで三つの音素 /i, e, æ/ のみを立てることにする. こうすると /i/ は 1, 2, 5 列において異音 [i] を，3, 4, 6 列において異音 [e] をもつことになる. 同様にして /e/ は 1, 2, 5 列においては異音 [e] を，3, 4, 6 列においては異音 [ɛ] をもつことになり，また [æ] にも [æ] と [ɑ] という異音があることになる. また 1, 2, 5 列の環境はあとに /t/ をもち，3, 4, 6 列は /p/ をもち，母音素はそれぞれ /t/ よりも /p/ の前でより開いた異音として実現されると一般に記述することができる. このばあい /p/ の前の /i/ の異音である [e] と，/t/ の前の /e/ の異音である [e] とは音声学的には同一である. この現象を音素どうしの交叉というのである. 言理学にとっては (また Jakobson にとってもそうだが) 疑わしい音がいずれの音素に属するかが明らかにされていさえすれば両音素が交叉しようがしまいがどうでもよいことであるらしい. 五つの単位の三つへの減少が彼らのいう簡潔の法則にかなうということが重要なのである. 要するに言理学によれば簡潔性は交叉よりも重要なのである.

Fischer-Jørgensen の第二の例は次の通りである.

第 2 図



ここでもまた縦の各列には三つずつの対立がある. しかしもしも上記のように線で各単語を結ぶと, /i/ は三つの異音 [i, e, ɛ] をもち, [i] は [m—t], [k—t], [k—p], [l—p] に現われ, [e] は [m—p] に現われ, [ɛ] は [l—t] に現われると記述せねばならなくなり, けっきょく全環境を列記することになる. 従って五つの音素 /i, e, ɛ, æ, ɑ/ を認めざるを得なくなり, /mɛt/ と /mɑt/ をあきまと認めることになるである.

以上のことから, 音声的類似は相対的に解されねばならないという拾い物的結論を引出すことができる. 第1図の mep, kep における [e] の絶対的性質は mit, kit における [i] と met, ket における [e] とのいずれに近いのであろうか? この疑問はわれわれの主たる関心事ではない. むしろわれわれは, met : mit = mɛp : mep, mæt : met = mɑp : mɛp といった比例式が成立つという事実に注目する. つまり met における [e] が同じ環境 [m—t] に現われる [i] から区別されるのは mɛp における [ɛ] が同じ環境 [m—p] に現われる [e] から区別されるのに等しいということである. このような区別の比例性というか相対性とかいったものが音声的類似の意味するものである. ただし Hjelmslev のいう形式的な意味ではなくて, 実質を考慮するという意味においてである. だから単に音声の実質を相対的に扱うというだけのことである. 音声的類似をこのように解すると, 異音分布についての記述が簡単になるばかりでなく, 多くのばあい同一の音素に属する諸異音の音声的差違が環境の影響によって説明されるという利点が得られもする. たとえば英語において立てられる比例式 hi /hay/ [haĕ] : he/hiy/ [hiḭ] = how /haw/ [haŏ] : who /huw/ [huṵ] によってわれわれが [ĕ] と [ḭ] が /y/ の異音どうしであることを認めるならば [ĕ] は先行の /a/ の影響で開いたものであり, [ŏ] もやはり /a/ の影響で開いたものと説明することができる. 同一の類に属する二つの音は同一の環境においては同一の影響を受けるのである.

このようにしてかの Bloch でさえも一時はこのような部分交叉を認めた. たとえば Bloch, 1941 を見よ. しかし一年後に彼によれば音声的類似は他のすべての音を除外した上で, 一連の特徴をそなえたすべての音によって構成されるという理由でそれを認めることをやめてしま

った．その故にこそ Bloch は 1942 年に Jones にあてた彼の手紙 (Jones, 1950, p. 97, 註 7 に引用されている) において，音素どうしの交叉はいかなる環境においてもいかなる条件下にあっても認められないと述べている．たしかに Bloch がいうように完全交叉（もしそれが存在するものとして）は認められない．部分交叉も Hill, 1958 がいうように[1]，認めるにしても最小限に止めるべきであろう．いずれにしても交叉を全く認めないのは不便である．[ŏ] が let の [e] に類似しているからといって eye [aĕ] を /áe/ と解釈することができるだろうか？ このように音声的類似を相対的に解するという根本の態度を定めておいて，Bloch, 1941 と Jones, 1950 に現われている音素の交叉の諸例を検討してみよう．

1. Bloch, 1941 (RIL, pp. 93 b—94 a)

多くのアメリカ人の言語にあっては音素 /t/ はその構成異音の一つとして，たとえば butter, betting, kitting (cf. budded, bedding, kiddy) におけるように，強勢母音のあと，母音間の位置に現われ，この位置において俗語的な有声の [t] または帯気・無声の [t] と自由に交代する歯茎のせん動音（ロンドン英語の very における [ɾ] とやや類似）をもっているとBloch はいっている．

しかし，アメリカ英語における /r/ の音声的実現は通帯舌尖摩擦音（そり舌音）であるからこの現象では交叉は問題とならない (cf. Jones の交叉の例 10). /t/ は /r/ よりもむしろ /d/ と交叉するのである．早い会話にあっては V́—V の環境に有声の歯茎破裂音が現われ，[d] と区別できないという．多くの言語学者がこの現象について実験をして来た．彼らのうちの一人は彼のインフォーマントが二つの語 bleating と bleeding のいずれが現われても意味をなすような環境において両者を区別できなかったと報告している．また他の言語学者は彼の学生たちの書くスペルの中に additude, cridical, edimology, exploided, medaphor; degrating, inatequate, metitate, petagogy といった誤記が発見されたと報告している．またもう一人の言語学者は過剰訂正の数例を挙げている．すなわち話し手たちは V́—V という環境においていったん失われた /t/ を取戻そうとしてもともと /d/ のものまで /t/ で置換してしまうのである（たとえば bidder, ready の代りに bitter, reaty と発音するといったふうに）．前記の degrating, ‥‥, petagogy といった例も過剰訂正の例である．通時的には音素の変化が進行中で，bidder と bitter は同音異語になりつつあるということもできよう．もしもこの変化の結果，個々の語彙は別として V́—V では /t/ : /d/ の対立はないということができるならば，これは音素どうしの交叉の例であり，音声的類似の見地からして bitter の母音間子音を /d/ の異音とする解釈が適当である．V́—V において /t/ : /d/ の対立がないといえないのであれば，たとえ同音異語の数が恐らくは増加するにしてもそれは交叉の一例ではない．

他方 Kenyon, 1946 (p. 123) はアメリカ人は latter, putting を ladder, pudding と混同

しはしないと述べている．それは latter, putting の母音間子音が有声ではり音（硬音）であるのに対し ladder や pudding のそれは有声でゆるみ音（軟音）であること，しかも先行する母音のあいだに長さの違いがあることによるのであろう．どうもこの位置で交叉が起ったと考えるのは時期尚早という感が深い．

2. Bloch, 1941 (RIL, p. 94 a)

twin, queen といった語の[w]の前に円唇化が現われるのは周知の事実である．しかしこれらの語を早くぞんざいに発音したばあいには [w] を形成する音声分子は著しく短縮されたり全く消え去ったりして，破裂音附属の先行的円唇化はその存在を示す唯一の痕跡となってしまう．このような円唇化を伴った破裂音にあっては円唇化はそれ自体で音素 /w/ の異音である．もっとも他の音の調音と同時に現われ，且つ tool, cool といった語にあっては音声的に同一な円唇化は有意味でなく，/t/ と /k/ の異音の，環境に従った単なる特徴であるけれども．

この現象について Block が述べていることにわれわれは賛意を表する．つまりここでは交叉は明白である．ただし部分交叉である．なぜならば後続母音の性格が常に円唇化のもつ二つの価値を区別するから．

3. Bloch, 1941 (RIL, p. 94 a—b)

中西部の方言にあっては，mints, mince, dents, dense はすべて [—ns] または [—nts] で，warmth は [-mθ] または [-mpθ] で，length は [-ŋθ] または [-ŋkθ] で，finds と fines は双方とも [-nz] または [-ndz] でそれぞれ終る．この事実は Bloch によると，鼻子音のあとに来る強勢音節の末尾では摩擦音と破裂音プラス摩擦音とのあいだに自由変異が起ると定式化できるという．

ところで鼻子音が [n] で摩擦音が [ʃ] か [ʒ] であるときにも [ʃ] と [t͡ʃ], [ʒ] と [d͡ʒ] とのあいだに自由変異が起る．すなわち bench は [-nʃ] か [-nt͡ʃ] で，hinge は [-nʒ] か [-ndʒ] で終る．子音群 [t͡s], [d͡z] および単一音 [t͡ʃ], [d͡ʒ] (Bloch はこれを単一と解釈しているが，これはわれわれの解釈とも一致している）とは音声的に比較が可能であり，[t͡ʃ], [d͡ʒ] が [ʃ], [ʒ] と異なるのは [t͡s], [d͡z] が [s], [z] と異なっているのと同じである．[t͡ʃ], [d͡ʒ] は [t͡s], [d͡z] とちがって二音の集まりではなく，単一音であるということはそれが有する別のパターン（その分布，他の子音の前後へのその出現ぐあい）から由来しているのである．しかし強勢音節の末尾，しかも鼻子音のあとでは破裂音プラス摩擦音というふつうの子音群として現われる．

Bloch によれば，この事実の最も簡単な記述法は部分交叉ということである．上記の位置以外のすべての位置では当該音は単一音である．ただ上記の位置においてのみ [t]+[ʃ], [d]+[ʒ] という二音群であって，他の音群と同じくそれに相当する単一摩擦音 [ʃ] と [ʒ] と自由交代する．

しかしわれわれはこの方言においては，強勢音節末に，しかも鼻子音のあとにおけるその出現の仕方に基づいて [t͡ʃ], [d͡ʒ] を二音と解釈する方がよいと信ずる．

4. Bloch, 1941 (RIL, pp. 94 b—95 a)

Jones とか Kenyon といった言語学者たちは about, sofa, condemn の無強勢母音を独立した一音素として扱いながら，その他の語（たとえば adding, city, window 等）の無強勢母音を，強勢のかかった異音をも含む各類に属するものと考えている．

他の言語学者たち，なかんずく Bloomfield は無強勢母音すべてを，強勢音節に位置した母音音素によって分類している．ここで一大問題が，発音のための強勢の規則によって二つの相異った形で現われる語におきる．たとえば at という語は where át？ という句では cat と同じ母音を持っている．しかし at hóme という句では sofa の二番目の母音となる．この語における二つの母音は常に種々の音声的条件下に現われ，相補的分布をなしているから，同一の音素の異音どうしとして扱うには絶好の例を提供してくれる．

しかしながら，この扱いに対して交叉を認める二つの反論がおこる．1. もし at hóme の弱母音が， where át？ の強勢母音と相補的分布をなしているからといって後者が属すると同一の音素の異音であるとするなら，about, sofa, confess および強勢母音と決して交代しない他の多くの語の無強勢母音についてはどう処理したらいいのだろう？ 英語における強勢は音素論的（示差的）単位であるとして Bloomfield に賛成し，それ故上記の諸語の無強勢母音を処理するために独立した別の音素を立てることをいさぎよしとしない Bloch のような学者は音声的類似と同型性を基にしてこの無強勢母音を cut, come, rush の強勢母音といっしょの類に入れることだろう．しかしもし abóut, atóne の弱母音がこのようにして cat の母音と同一視されるならば，同じ音声的条件下での同一音の継起は相異る音素に帰せられることになる．2. sofa の語末に現われる「中性」母音は英語のほとんどすべての音節核音素の無強勢異音として機能するに至るであろう．いいかえれば，すべての音節核音素はその無強勢異音において交叉をするであろう．

この二つの反対は有力である．Bloch も次のように結論している：つまり同じ条件下での特定音 x の継起が相異る音素に帰せられねばならないような体系は必らずこわれる，なぜならば音素論的分析にとっての唯一の有効資料である音声的諸事実にあって，ある特定発話でどの種の x を取扱っているのかを教えてくれるものが何もなくなってしまうからと．こうして完全交叉の存在は否定される．

その上，at がある環境で /ǽt/ として現われ他の環境で /ət/ として現われても当然である．このばあい形態論的考慮を導入するのはまちがいである．at が /ət/ と /ǽt/ の二つの異形態をもつことは不便でも何でもないのだ．

5. Bloch, 1941 (RIL, pp. 95 b—96 b)

アメリカ英語の中西部方言の一例. bit bid, bet bed, bat bad, but bud, bite bide, beat bead などのペアはおのおの同一の母音音素を持っているが, その異音各々の長さにおいて規則的で, かなりコンスタントなちがいを示す. このちがいは, 母音と二重母音（そしてまた流音と鼻音も）とは無声子音よりも有声子音の前で長いという英語発音上の有名なくせによるものである. 長い異音と短い異音との交代が英語の全音素体系にわたっている. pot の母音も同じ自動的交代をする. つまり pot pod, cop cob, font fond といったペアにおいて最初に書かれた諸語の母音は, 一般にあとに書かれた諸語のそれより短く, pot pod のようなペアがどのようにしても bit bid と比較できないということを証明するものは現在のところ何もないのである.

他方, Bloch の個人語にあっては bomb は balm と異なり, bother は father とは韻を踏まず, また sorry も starry とは韻を踏まない, つまりこれらの語にあっては母音の性質はみな同じであるが, 各ペアのはじめに書かれた語群では母音が短かく (pot におけるように), また各ペアのあとに書かれた語群では著しく長いのである. 長さのちがいは (bit bid におけるちがいのように) 自動的交代として説明できないので, Bloch は bomb と balm, bother と father, sorry と starry とは相異った母音音素を有していると結論している. そして当然のことながら, bomb, bother, sorry の母音を pot の母音音素と同一とみている. balm, father, starry の母音は alms, palm, pa, star, card においても現われている. ここでもまた, 音素論的構成がある意味で不規則であることを証明するものは現在のところ何もないのである. しかしすでにここで困難が生じている. すなわちそれは上記のことに従って発話断片 pod は, pot の母音より著しく長い母音 (bid のそれが bit のそれより長いのと同じく) を持ちながらも pot, pod の母音音素を有していると分析されねばならないにもかかわらず, それが Ppa'd go (if he could) という句における Pa'd と音声的に同一であるということである.

同一条件下における x の二種類の現われ方はそれぞれ相異る音素に属する.

Bloch は以下のように考える. 交叉は他のばあいと同じくここでも認められない. なぜならばわれわれが音声的事実に直面したときもしそれを出発点とするならば, 発話自体の中にどの種類の x 音を取扱っているのか告げてくれる指針が何もないからである. pot の音素と balm の音素との明白な交叉は, われわれが音声の諸原則と一般に有効とされている方法とに従って交叉の両側で分析を行なったにもかかわらず, その分析はにせものであるという（他のやり方であれば疑いを抱かれもされなかったような）事実を示している. もし Pa'd go における断片 Pa'd が, 他の事情が同じだとして, The pod grows の断片 pod と同一であるなら, 両者は同一の音素を有している.

かくして彼は pod の母音を——従って rob, nod, bog, fond などの母音をも——, bit : bid = bet : bed = bite : bide といった諸ペアの美しい平行を犠牲にして, balm の有する母音音素の異音として分類している.

筆者としては音声的事実よりもこの平行, この対称を尊重したい. なぜならばこのばあいには交叉が有効であることを認めるから.

6. Jones, 1950 (pp. 93—94)

フランス北部方言の音素 /ɔ/ と /œ/ について. 音素 /ɔ/ の最後方異音は, porte [pɔRt] におけるように, 他の子音を従えた [R] の前に用いられるものである. もう一つかなり後方の異音は corps [kɔ : R] におけるように [R] の前でのみ用いられる. 前方異音は他の環境たとえば homme [ɔm], bonne [bɔn], étoffe [etɔf], cloch [klɔʃ], vol [vɔl] に現われる. /œ/ の後方異音は heurte [œRt], coeur [kœ : R], refair ['Rœfɛ : R] におけるように, [R] が先行したり後続したりする時に現われ, 前方異音は jeune [ʒœn], oeuf [œf], veulent [vœl] といった語に現われる.

かくてフランス語の最前方の [ɔ] は最後方の [œ] と似ている——たとえば [œRt] と [klɔʃ] における母音はお互いよく似ている.

この困難は比例式 cœur : corps = veulent : vol=/œ/ : /ɔ/ によって解決される.

7. Jones, 1950 (pp. 94—95)

フランス語の音素 /e/ と /ɛ/ の部分交叉の例. 閉じた異音は [s] や [t] の前, なかんずく [s] や [t] のあとに [e] や [i] が来るときに用いられ, 開いた異音は [R] の前で用いられる. このようにして précis [pResi] の [e] は héros [eRo] の [e]より閉じており, exquis [ɛkski] の [ɛ] は cerveau [sɛRvo] や erreur [ɛRœ : R] の [ɛ] より閉じている. 従って [ɛ] の最も閉じた異音と [e] の最も開いた異音とのあいだには僅かのちがいしかない. 事実多くのフランス人の発音において両音が同一であったり, 最も閉じた [ɛ] が最も開いた [e] より閉じていたり, つまり [ɛkski] の [ɛ] が [eRo] の [e] と同じだったり, より閉じていたりさえすることだってあり得るのだ.

この交叉は次の比例式によって解決される.

héros : cerveau = précis : exquis = /e/ : /ɛ/

8. Jones, 1950 (p. 95)

ロシヤ語の部分交叉の一例. ロシヤ語では音素 /e/ と /a/ のある種の交叉が恐らくあるようだ. 音素 /e/ は基本母音 [e] (pet'「歌う」[pʲetʲ] におけるように二つの口蓋化子音にはさまれた) と基本母音 [ɛ] の下に位置するひじょうに開いた, やや後寄りの音 (etot「これ」['etat] や žertva「犠牲」['ʒertva] におけるように語頭において または [ʃ] または [ʒ] に先

立たれ，ふつうの子音に伴われて）とのあいだを上下する諸異音を持っている．音素 /a/ は前方・開口の [a⊥] または [æ] (pjat'「五」[pʲatʲ] におけるように口蓋化子音のあいだの）とひじょうに後寄りの [a] (palka「ステッキ」['paɫkɑ], sat「庭」[sat] におけるように，ふつうの子音に先行され，[l] に伴われて）とのあいだを上下する諸異音を有する．

この交叉は次の比例式によって解決される．pet' : pjat' = etot : sat = /e/ : /a/.

9. Jones, 1950 (p. 96).

一仮想例．/k/ と /q/ の交叉が [q] と [ɯ] とを有する言語で明るみに出ることがあるかも知れない．この言語では音節 [qi] の [q] が音節 [kɯ] の [k] と同じ調音点をもつことが発見されてもふしぎではない．

この交叉は [ki] : [kɯ]=[qi] : [qw] = /k/ : /q/ という比例式で解決される．

10. Jones, 1950 (pp. 96—97)

1. Bloch, 1944 (RIL pp. 93 b—94 a) と同様の例．Jones は一般に [ʃ] は同じ環境において用いられる [ɹ] と，すなわち carry ['kæɹi] におけるような [ɹ] とはちがうし，また ladder ['lædə] における [d] ともちがうという印象をもっていると結論している．

ここで部分交叉を扱った“音素の交叉”と題した第 19 章が終っている．これから先では完全交叉が取扱われている．上記の部分交叉の諸例のほかに，Jones はすべてふつうの環境にあってはある音は一言語の一つ以上の音素に属し得ないと信じている．しかし彼はわれわれにとっては例として不適当な完全交叉の数例を認めざるを得ない．Jones によれば完全交叉容認の二条件とは，(i) 音素類別のふつうの原則に執着すると形態論の分野で不つごうが生じるようなばあい，または (ii) 単語間の関係を不必要にあいまいなものとしてしまうばあいである．単語を基とした音素論の見地からは形態論的考慮によって（「二音素的な」音の）完全交叉がおそらく認められるだろう．しかし音素論のレベルを形態論のレベルと区別しようとする人々によってはこれは認められない．

Jones は完全交叉を二つのタイプに分けている．(i) 付随的ならびに独立的に現われる音どうしの交叉．(ii) 一音を二つの音素のうちいずれにでも帰し得るに十分なだけの理由ある時．

11. Jones, 1950 (pp. 99—100)

これが付随的ならびに独立的に現われる音として Jones が引いている例である．

それはヒンドスタン語の [ẽ] のばあいである．ヒンドスタン語では一般に鼻子音に先行された母音は鼻音化することになっている．それゆえ，ヒンドスタン人はこれに気付かないのがふつうだがふつう ne とつづられる接尾辞は通常 [nẽ] と発音される．彼らは [ne] と発音していると信じており，[ne] という発音ですら正しいとして容認されるだろう．この鼻音化は付随的である．[ẽ] 音はまた /e/ とは独立した一音素として非鼻子音のあとに「独立的」にも現

われる．たとえば，[pē]「歌って」，[ghēt]「のど」，[dēgi]「ボート」といったふうに．しかし時には鼻子音のあとでも独立的に現われることがある，たとえば，[mē]「～の中に」がそれで，このばあいヒンドスタン人は [me] を正しい代替形とは認めないだろう．

以上の音声データから Jones は，ヒンドスタン語にあっては鼻子音が先行するいくつかの語では [ē] 音を音素 /e/ とし，他の語においてはそうしないのがよいと結論している．

筆者としては，*/mē/ との音素論的対立がないという条件の下に，[mē]「～の中に」という語を音素論的に /me/ と解釈したい．こうすれば鼻子音のあとという環境で鼻母音は /v/ と解釈されるが，その他の環境では /Ṽ/ と解釈されることになる．けっきょくこれは部分交叉の一例でしかない．音素論のレベルでは，他の解釈をわれわれに要求するような音素論的対立または同型性の圧力が介入しないかぎり，鼻子音のあとの母音の鼻音化が独立的であろうと付随的であろうとそれはかまったことではない．その音素論的解釈はつねに一つである．

二音素のうちのいずれとも解釈できる音のばあいに移ろう．Jones にとってはあるばあいに完全交叉を認める以上，そのおのおののばあいに恣意的な解決を与えねばならなくなる．彼は三つの可能な解決法があるだろうという．すなわち当該音は，(i) 何らの理由もなく選ばれた二音素中の一つに帰すことができるか，(ii) 両音素から独立した第三の音素として扱うことができるか，(iii) 二音素的，つまりある語では甲音素に，また他の語では乙音素に属するものとして扱うことができるあろうと．そして彼としては第一の解決を推薦している．われわれは完全交叉を認めないからここで Jones が述べていることにはまったく承服できない．音素どうしの完全交叉を用いて音素論上の困難を解決したい気が起った時にはより適当な解決がまだ他にあるものと心得るべきである．

12. Jones, 1950 (pp. 101～103)

これは日本語の完全交叉の一例であるが，おそらく Jones は現在の日本語の音声体系について十分知ることができなかったのだろうと思われる．従ってその自信のなさから彼は一つの仮定の例として提出している．しかし仮定ではあるが，根底において本例が日本語であることは明らかであり，――もし真に仮定のものであるなら，時に完全交叉が存在することを証明するために有効とはいえない――彼の誤まりをそのままに放置するわけにはいかない．

Jones によるとこの架空の言語では

[d] は [i], [e], [a], [o] の前にのみ現われ，

[z] も [i], [e], [a], [o] の前にのみ現われ，

[d͡z] は [u] の前にのみ現われ，

[d] と [z] とは明らかに別々の音素 /d/ と /z/ に属するという．しかし [d͡z] 音は [d] 音と [z] 音とが現われない音声環境にのみ現われるから，両者とは別個の一音素を形成するわけで

はなく，それらのうちのいずれか一つに帰せられねばならない．

残念ながら現在の日本語の音声体系は上記の如くではない．原，1963, pp. 13—14 を参照されたい．

/z/ の系列

(i) 語頭および音節核音的 [ɳ] のあとでは

[d͡za, d͡ʒi, d͡zɯ, d͡ze, d͡zo; d͡ʒa, d͡ʒw, d͡ʒo]

(ii) 母音間では

[za, ʒi, zɯ, ze, zo; ʒa, ʒɯ, ʒo] ([ʒ] の円唇化はほとんどないといってよい)

このことから (i) における破擦化は音素論的には無関係であることがわかる．/s/ の系列が /sa, si, su, se, so; sya, syu, syo/ と解釈されるから，同様に /z/ の系列も

/za, zi, zu, ze, zo; zya zyu, zyo/

とする．

/d/ の系列

(i) 語頭および音節核音的 [ɳ] のあとで

[da, d͡ʒi, dzɯ, de, do; d͡ʒa, d͡ʒɯ, d͡ʒo]

(ii) 母音間で

[da, ʒi, zɯ, de, do; ʒa, ʒɯ, ʒo]

/z/ の系列と共通の下線を引いた五項に注目していただきたい．/z/ の系列について下された解釈を尊重すれば，/d/ の系列の解釈は

/da, zi, zu, de, do; zya, zyu, zyo/

とならざるを得ない．

Jones は誤まりに充ちた彼の音声事実を解決するのに決定的な規準が見つからないので，ついに歴史的事実に頼るが，これとても何ら寄与するところがない．

13. Jone, 1950 (pp. 103—104)

東京の一方言には [h] ([ç] の弱い異音) と [s] とを排除して [i] の前に現われる [ç] という子音があり，これは二音素完全交叉の例だと彼はいっている．しかしここでも彼はまちがっている．上記方言にあっては [hi] (または [çi]) が [ʃi] と一致し，/h/ の系列にあきまができるのである．たとえば，[hi'roi̯] または [çi'roi̯]「広い」と発音する代りに，[ʃi'roi̯] /sirói/ と発音するのである．

東京の標準的な方言の /h/ の系列

/ha, hi, hu, he, ho; hya, hyu, hyo/

[ha, çi, fɯ he, ho; hya, hyɯ, hyo]
ç hɯ
f ,

/s/ の系列

/sa, si, su, se, so; sya, syu, syo/

[sa, ʃi, sɯ, se, so; ʃa, ʃɯ, ʃo]

前記東京方言では下線を施した /hi/ が消え，あきができるのである．

14. Jone, 1950 (p. 106)

4. と同じ例である．Jones も [ə] が [ʌ] と [a] と完全交叉するという解釈には反対している．なぜならば彼のいうところによると，(i) [ə] は [ə:] と同一視される．(ii) [ʌ] と [a] が弱い強勢を持つことができないと規定することには承服できない．(iii) 第一と第二の理由が論破されたなら，[ə] を /ʌ/ に帰せしめればよいからである．

ここまでで，考えられ得る交叉の例 14 についての筆者の検討を了えることにする．けっきょくそのうちのあるものは交叉の例として認められ，またあるものは不適当として抹消せられた．われわれは音声的類似を相対的に解することによってついには部分交叉を認めたわけである．しかし完全交叉はこれを認めなかった．

中和に対する第四の反対論は，「中和」という用語によって定義される現象はすべて「不完全分布」によってずっと簡単に解決されるというものである．

これに対する Bazell の反論は次の通りである．すなわち中和のうち大部分のケースは不完全分布の特殊なばあいと考えてもよいが，それがまったく真というわけではない．たとえばデンマーク語において，帯気/無気の対立は対立の一項の脱落によってでも中間的な音の出現によってでもなく，むしろ自由変異の関係により両音が現われることによって語末で中和されるのであると．

筆者もここまでは彼と同意見である．しかしその次に彼が述べていることにはどうしても納得がいかない．彼はこの自由変異のケースを，他の明らかに類似のばあい，たえばドイツ語の語末の有声/無声の対立の中和から引離すことは極度に人工的な解決であるという．しかし筆者は二音素（二音に非ず！）の自由変異と不完全分布とは別のものであることを主張したい．両者は別個に取扱われるに十分なだけの異質性を具えている．いわゆる中和なるものの欠点は，それが「中和」という単一の概念の下に統一されるにはあまりにも相互に異質的な諸現象を包含していることにある．

彼が，あらゆる環境において同一単音には同一解釈を与えるべきだという原則が最も非実際的であるのはまた，他の環境では示差的対立関係にある特徴どうしの動揺のばあいでもあり，

上記原則が帯気破裂音で終るデンマーク語のすべての形態は音素論のレベルにおいてすら無気破裂音で終る相棒を有するという補足的説明を必要とするであろうという時，われわれにはBazell のいうことは正しいと思える．しかしわれわれはもっと先で，厄介で複雑な原音素[2]を設定することもなく，また「同一単音に対しては常に同一音素論的解釈」という原則を破ることもなしにこの困難に合理的解決を与えることにする（p. 31 を見よ）．

このようにして筆者は不完全分布と音素どうし（音どうしに非ず！）の自由変異を中和の範疇から取出し，独立の現象として扱うことにする．といってわれわれは中和をまったく認めないわけではない．正にそれだからこそ，示差的機能の欠如のために中間的な音が現われることがあるから二つの形のうちいずれが現前しているかをいうことはしばしば困難であると彼がいう時，われわれは彼に賛意を表するのである（p. 23 を見よ）．

われわれの態度はかようなものであるから，不完全分布の使用を不必要に，そしてほとんど不当に制限する Bazell の態度をわれわれは理解できない[3]．その上彼は中和に対する第四番目の反対論を論破したと信じている．たしかにそうかも知れない．しかし彼の中和支持論の中には一語も不完全分布を論破するための語が見当らない．不完全分布といえども正当な取扱いを受ける権利はある．だからこそわれわれは不当にその適用を制限することを認めないのである．

われわれはその適用の価値以上にそれを利用するというのではもちろんないし，その価値以下にしか利用しないことにも不賛成なのだ．

第5番目，つまり最後の中和反対論はこの概念の適用が恣意的であるということにある．Bazell 自身でさえ明らかにある種の中和の制限は恣意的であったことを認めている．たとえば英語で [l] を第二の要素とする語頭子音群における t/k(d/g) の対立の欠如を中和の一例とみなすのに十分な理由は何もない．事実これは，英語の話し手の多くが上記環境で [k] と [t] を交代せしめている以上，特徴の認定の際大いに困る一ケースである．これは，最小対立についてのみならず，複数の特徴間の対立についても中和が起ることを認めないかぎり二項体系の中に入れることはできない．こういった拡大適用を行なうと．中和は実際上余剰と同義語となってしまう．この点に関する Bazell の発言を通じてこの [t] と [k] の自由交代がどれほど中和の弁護人たちを悩ませたかがよくわかる．

これに対する Bazell の解決法は二つある．

(i) 中和と二項原則との関係の問題には関心がなく，二項原則を認めるのであれば上記の例を排除することは恣意的ではないというだけで十分であると彼はいう．

ではいったい上記例に対する彼の解決法は何であろうか？　はたして自由交代であろうか？一元的対立には中和が適用できるが，多元的なものには適用できないことには誰一人として納

得できないであろうから，これはすべてのうちで最も恣意的な解決となるだろう．実をいうと，Jakobson, Fant & Halle, 1952 の p. 43 にのっている示差的特徴の表によると，t/k の対立は一元的，つまり diffuse/compact である．しかし Bazell は別の解決法をとる．

(ii) 彼は次のようにいう．もし Trubetzkoy の三元対立が認められるなら，中和の原理は三項のうちの二項どうしの示差的対立がある環境において抑止せられるようなばあいをもカバーするほど拡張できる．Trubetzkoy が述べたように，/t/ と /k/ を /p/ から区別する共通の積極的特徴は一つもないというのは真実である．しかし共通の特徴は消極的に「grave でないこと」(このばあい acute ともちがう) と定義できる．ここで必要なことは定義が積極的であることではなく，ただ単に単一の特徴にもとずいているということである．

このあまり歯切れのよいとはいえない Bazell の弁明にとって，Bloch, 1950 の一節 (§5.2.) が支えとして役立つであろう．

(日本語の) 自由変異音

[f, h] (L/G 3) [f] の現われるすべての環境に [h] も現われる．L/G という表記 (唇音または声門音) は歯音でもなく前硬口蓋音でもなく軟口蓋音でもない——つまり一語でいえば舌音でないと解釈できる．L/G という性質は非連続的 (その交代形および一つまたはそれ以上の中間的性質の除外を含む) であるけれども，一連の中間的性質が非連続的でないならば音素論において非連続的性質の容認は有効であるという——正にそのためにこそ採用された——原則を基にして正当化することができる．D, P, F, B といった一連の性質 (歯音，前硬口蓋音，前軟口蓋音，中軟口蓋音) は L と G とのあいだに位置し，その全構成メンバーは一つの類，つまり舌音類の下位区分であるから非連続的ではない.」(RIL p. 340 a)

さてスペイン語のばあい，多項的対立にも共通する単一な消極的特徴を探し求めねばならないことはもちろんであろう．たとえば Beym, 1963 によると，ブエノス・アイレスの方言では naftalina-nastalina のように音節末で /f/ と /s/ の自由交代が見られる．中和の擁護者たちに従うと一共通特徴を四苦八苦して探し求めねばならない．恐らくそれは grave/acute だろう．カスティリャ方言では音節末において /d/ と /θ/ のあいだに自由交代が見られる．そこでは頻繁に [aθβɛɾ'tiɾ], [aθmi'ɾaɾ] などの発音が聞かれる．ではその共通特徴は？ 恐らく lax/tense, であろう．しかし ['aθto], ['rɛθto] などにおけるように /k/ と /θ/ では compact/diffuse であろうか continuant/interrupted であろうか？ また [iθno'ɾaɾ] におけるように /g/ と /θ/ では，compact/diffuse であろうか，lax/tense であろうか[4]？

中和適用によっては解釈のむずかしい例はどんどんふえていく．

(i) A. Alonso, 1945

「スペイン中南部の俗っぽい発音では摩擦歯音 [θ] と [δ] の前に来る [-s] に対し異化作用

として（程度の差こそあれ）[-ɾ] の性質が与えられ，erceso, ercena, arcenso, lor dedos, lor dientes といったふうに発音される.」(p. 245).

(ii) Alarcos, 1961.

「対立 b/m は時々中和されることがあるが，その際は音声的実現としてやや弛緩した形で両音素とも現われる．教養語では bm という子音群が現われることがある．その際 /b/ と /m/ に共通の両唇調音は歯音性の逆行同化を助ける．実をいえばこの環境では二音素 /b/ と /m/[5] は意味の区別のためには役立たない．例: submarino.」(p. 176, 脚註 6).

cf. Navarro, 1959, §80. 破裂の B

「submarino, submúltiple などにおいてはひじょうに弱く短い内破の [b] が発音されるが，たいていのばあいは次に来る [m] に同化されてそれとともに単一調音を形成して [m] となる．ただし単一調音といってもふつうの [m] よりちょっと長く，相隣接する二音節間にまたがる．[su̯ ᵝmɑ'ɾino] または [su̯ ᵐmɑ'ɾino]」(p. 84).

(iii) Malmberg, 1963.

「ふつう中和されるもう一つの対立は有声音と無声音のあいだのそれである．doctor という語は [k], [g], [ɣ], [u̯] または内破子音なしで発音される．これは用いられる発音の教養程度しだいである ([dɔu̯'tɔɾ] と [do'tɔɾ] はそうとう俗っぽく，[dɔɣ'tɔɾ] や [doɣə'tɔɾ] は口語的である)．このことは子音と「半母音」との対立でさえ中和されることを示す．俗語ではその他の子音でさえ半母音になったり，音節末で消失したりしがちである．唇音と軟口蓋音は [u̯] となり (objeto [ɔu̯'xeto], cápsula ['kau̯sula])，歯音は [i̯] となる (padre ['pai̯ɾe], porque ['pɔi̯ke], など).」(p. 134).

ef. Trubetzkoy, 1939[6].

「もし中和される対立が論理上均等であれば，原音素の代表の選択が内部的条件しだいになることは当然不可能である．しかし論理上均等な対立の中和はけっきょくのところたいへん稀な現象であることも事実である.」(pp. 85—86)

これにかてて加えて，中和の擁護者の一人でありながら Martinet, 1955 a が述べているところはいわゆるこれら「多元的」対立に「中和」という概念を適用するのにたいへん不利になっている．彼の論旨を要約すると以下のようである．

「特筆に値いしない関係の型として /p/—/t/ や /p/—/k/ が /p/—/l/ または /k/—/a/ といっしょにされていながら，他方では /p/—/b/ のみを優遇していたのは一大ミスであった．のちになって，/p/—/t/ と /p/—/k/ を二項対立のランクにまで昇進せしめることによってのみ償い得るような恐るべき不正のケースのようにこれが見えて来たとしてもふしぎではない．しかし真の解決は強制的な二項対立にはなく，構造上の基本的二要素は比例的対

立と非比例的または独立的対立とのあいだに存在するものであることを認めることにある．真に重要なことはある関係の型が別の形で同一のパターンの中に存在するかどうかということである．たとえば /p/—/t/ という関係が別のペア /b/—/d/ の中に見出されるとすれば，/p/—/t/ はたとえば /p/—/b/ と同じく「相関的」なのである．

さて，もしたとえば /p/—/b/ と /t/—/d/，/p/—/t/ と /b/—/d/ の平行的関係が重要であるとするならば，/p/—/b/ のばあいどの調音的特徴が真に関係があるのかという問題を詳細に議論する心要はない．関係があるのははたして無声/有声か， tense/lax か，それとも両者なのか，はたまたまったく別のものなのか？ 実はこれらすべてがいっしょになって程度の差こそあれ語頭や母音間にふつう現われて示差のために現実に貢献しているのである．」(pp. 115—116).

多くの言語学者が二項対立の絶対的有効性を疑問に思っているのは事実である．それを疑う理由はとりわけ，一音素にはいくつかの異音があり，あるばあいには一異音の余剰的特徴の方が他の諸音素の諸異音から当該異音を区別するための示差的特徴以上にはたらくことにあって，二項対立の原則はこのことを説明できないのである．

最後に，Bazell が中和の適用範囲を再度制限せねばならなくなって二つ目の大障害にぶつかるとき，われわれは音素の自由交代および不完全分布の両者に中和を適用することを最終的に，あとで絶対に取消すことなく拒否するのである．

Bazell はいう

「たとえば英語には語頭子音群として sl- と shr- というのはあるが，sr- や shl- はない．従って子音群の第一音素にでも第二音素にでも中和を適用することができよう．または反対に，中和の位置があいまいだからこそこのばあいに中和について語るのをやめることだってできるだろう．これが「交替余剰」のばあいにもっともふつうな処理方法である[7]．」(p. 28)

われわれにとってはそれは不完全分布のたいへん簡単な一例でしかない．

けっきょくのところ，こんなにまで苦労して共通する単一な消極的特徴を探し求め．他の方法ならずっときれいに解決できるのにその適用を制限してまで，中和という概念を弁護せねばならないのだろうか？ 中和はこれほどまでの優遇を受けるに値いするのだろうか？ われわれはそうは思わない．これよりもずっとすぐれた解決法はないのだろうか？ われわれの答は肯定である（つまりあるのだ）．

たとえてみれば Bazell は底なしの泥沼に落ち，階段があってたやすく陸にあがれることに気づかずにすべりやすい岸辺でヤッサモッサともがいている人のようである．彼は勇敢にも中和に対する五つの反論に反駁を加えて行き，最初の三つの反論に対しては反駁に成功した．しかし第四と第五の反論についてわれわれを納得させることに成功したとはとうてい思えない．

われわれは次のように提案する．中和という概念の中には，一範疇に含ませるにはあまりに多様ないくつかの要素が含まれている．従って，それが適当と思え，そうすれば他のもっとすぐれた解決法が得られる確信が持てる時はいつでも，中和を他の方法によって置換えてその使用範囲を縮少するとよい．それ以外の方法ではうまく解決できない一つのばあいがあるので，われわれは中和の使用を完全に無視することはゆめゆめ考えていない．

さて，このわれわれの結論を基にして Trubetzkoy が Trubetzkoy, 1939, pp. 82—87 において挙げている中和の四つのばあいを検討してみよう．

［第一のばあい］　中和の位置に現われる中和可能な対立の原音素を表わすものが当該対立の二項のいずれでもないばあい．

（a）　対立の二項の実現と音声的に関係があるが両者のいずれとも一致しない音が現われるばあい．

（i）　ロシヤ語では口蓋化した唇音と口蓋化しない唇音とのあいだの対立は口蓋化した歯音の前で中和され，その中和の環境には特殊な，「半ば口蓋化」した唇音が現われる．

（ii）　英語では有声のゆるみ音 [b, d, g] と無声のはり音 [p, t, k] との対立は [s] のあとで中和され，その環境には特殊な無声・ゆるみ音が現われる．

（iii）　ババリヤ・オーストリヤ地方のある方言でははり音とゆるみ音間の対立が語頭で中和され，特殊な半ばはり音または半ばゆるみ音がそこに現われる，等々．

これらすべてのばあいに原音素は対立の両項の中間的な音によって表わされる．

（b）　原音素を表わすものが，対立の他項と共有する特徴のほかに，特殊で独自な特徴をもつようなばあいは (a) とやや異っている．この独自な特徴とはそのかたわらで対立の中和が起る音素への近接の結果にほかならない．このようにして，たとえば

（a）　中国の北京方言では [i] の前で [k]—[t͡s] の対立が中和され，原音素として口蓋化した [t͡ʃ] が現われる．

（b）（トバゴ島）) のヤミ語では口蓋化した [ʎ] が歯音の [l̪]—そり舌音の [ɭ] の対立の，[i] の前における原音素を表わす．

《筆者の論評》

この第一のばあいに「中和」という概念を適用することを筆者は正当と考える．このばあい中和より適当な解決が他にないからである．ただし不完全分布でそれを置換えることが適当と思える時はつねに中和を用いない方がのぞましいことを念頭に置くべきである．

この前提に立って Trubetzkoy の五つの例を検討してみよう．

（a）（i）ここで Trubetzkoy が引用しているロシヤ語の口蓋化した子音は音声学上の論議をするにふさわしい問題を選択を提供してくれる．一般にその音素論的解釈はそれが現われる

環境しだいである．口蓋化していない子音と音素論的に対立するのは，1. 母音の前でである．sam「自ら」['sa·m] /sam/—sjam（ここに）['sʲa·m] /sjám/ 2. 口蓋化していない子音の前でである．varka（発酵）['va·rkə] /varka/—Var'ka（固有名詞）['va·rʲkə] /varjka/ 3. 語末においてである．ves（重量）['vʲɛ·s] /vés/—ves'（ぜんぶ）['vʲe·sʲ] /vésj/. しかしこの対立は他の口蓋化した子音の前では「中和」される．dvor（大きな家）['dvo·r] /dvór/—dver'（ドア）['dʲvʲe·rʲ] /dvérj/. 口蓋化しない子音と口蓋化した子音とのあいだの対立については二つの音素論的解釈がある．I) Jakobson はそれら二種類の子音のそれぞれを独立した音素と考えている．たとえば，/p/ : /pʲ/, /t/ : /tʲ/, などというふうに．このようにして口蓋化した子音はその口蓋化しないペアと対立するが，子音音素の数が二倍にふえてしまう．II) 他方簡潔性の原則に基づく言語学者たち（たとえば服部）は音素 /j/ を立て，音素の数を減らす．従って，/p/ : /pj/, /t/ : /tj/, などのようになる．この論文では後者の音素表記を採用している．

Trubetzkoy は彼の中和理論を dver'（ドア）['dʲvʲe·rʲ] に適用して /Dvérj/ と解釈するであろう．しかしこの例はむしろ彼のいう「第二のばあい」に属し，服部のいう同化の作業原則によって説明される．

そうすると，口蓋化した唇子音と口蓋化しない唇子音との対立が中和され，その位置に半ば口蓋化した唇子音が現われるというのははたして真実なのだろうか？ たとえ真実としても，この記述はたいへん音声学的であり，さらにこの半ば口蓋化する傾向は dver' のばあいにかぎらずずっと一般的であるようにわれわれには思われる．

口蓋化した子音の前での非口蓋化子音の，口蓋化調音への同化現象はもともと古いモスクワ方言の一特徴であって，現代の標準ロシヤ語ではむしろ辞書の上だけのものとなっており，いいかえれば伝統的スタイルに属する語ではたしかに起るが，口語的スタイルの語や外来語では起らないことになっている．また接頭語と語根のあいだ，語根と接尾語のあいだ，無強勢語と伝統的な自立語のあいだでもこの同化は起らない．したがってこの位置での強い同化は下品または無教養を意味すると考えられている．同化の程度は完全な口蓋化でも中途はんぱな口蓋化でもよい．Trubetzkoy は革命前のモスクワ生まれであるから，おそらくいちじるしい口蓋音への同化を聞き慣れていたものと思われる．しかし「唇音プラス口蓋化した歯音」という子音群においてのみ唇音が半ば口蓋化されるといっているのには賛成し難い．その他の例を挙げておこう．中途はんぱな口蓋化は [·] で表わすことにする．

(i) 唇音（唇歯音）プラス歯音

ptica（鳥）['p̈tʲi·t͡sə] /ptjíca/

psixologia（心理学）[p̈sʲᶻxʌ'ɪo·gʲᶻʃə] /psjixológija/

vsja (すべての) [ˈf̈·sʲa·] /vsja/

vnimanije (注意) [v̇nʲɿˈmɑ·nʲɿǰə] /vnjimanjije/

mnenije (意見) [ˈm̈nʲe·nʲɿǰə] /mnjénjije/

bditel'nyj (注意深い) [ˈɓdʲɿ·tʲɿɿʲnɿj] /bdjítjeljnij/ (ロシヤ語の辞書ではこの中途はんぱな口蓋化は表記されない)

(ii) 唇音 (唇歯音) プラス唇音 (唇歯音)

vvjol (導入した) [ˈv̇vʲo·l,ˈvvʲo·ɫʲ] /vvjól/

vmeste (いっしょに) [ˈv̇mʲe·s̈tʲɿ, ˈvmʲe·sʲtʲɿ] /vmjéstje/

v lampe (ランプに) [ˈvɫa·m̈pʲɿ, ˈvɫa·mpʲɿ] /vlampje/

(iii) その他

(a) 歯音プラス歯音

stesnenije (圧力) [sʲtʲɿsʲˈnʲenʲɿǰə] /stjesnjénjije/

zdesˈ (ここに) [ˈzʲdʲe·sʲ] /zdjésj/

pjatnica (金曜日) [ˈpʲa·tʲnʲɿt͡sə] /pjatnica/

(b) 歯音プラス唇音 (唇歯音)

dverˈ (ドア) [ˈdvʲe·rʲ,ˈd̈vʲe·rʲ] /dvjérj/

tvjordo (固く) [ˈtʲvʲo·rdə] /tvórdo/

spešitˈ (急ぐ) [sʲpʲɿˈʃi·tʲ] /spješítj/

要するに，現代標準ロシヤ語では一般に，口蓋化した子音の前の子音 (特に歯音) はやや口蓋化した調音へと逆行的に同化する傾向がある．しかし Trubetzkoy のように，この中途はんぱな口蓋化のばあいを中和の第一のばあいに属するとすることには何ら根拠がない．唇音や歯音が口蓋化する時に認められる僅かな音声現象を彼はあまりに音素論的なものととり過ぎたのである．もし彼が古いモスクワの口語の発音について論じたかったのであれば，中和の第二のばあいの例と考えるべきであったろうに．

(iii) ここでも同型性による解決法があるだけに中和を用いる必要はない．/s/_V 以外の環境で子音群 /st/ または /sd/ が現われるかどうか見てみよう．bust—buzzed に /st/ : /zd/ の対立が見られる．bust の [t] は /d/ の異音と対立するから /t/ に属すると考えてよい．これに対して /sd/ とか /zt/ という子音群は現われない．従って /s/_V という環境に現われる無声・lax 音は，同環境における /d/ の不完全分布という犠牲と引換えに /t/ と解釈される．アメリカ言語学派名附けるところの「複式相補的分布」の典型的な例である．

(iii) 前記のデーターだけではこのケースには中和を適用せざるを得ない．

(b) (i) [t͡ʃ] を /c/ (= [t͡s]) と解し得るかも知れない．なぜならば [i] と [y] の前で /c/

が口蓋化した形をとるに十分な音声学的理由があるから．中和を適用するには及ばない．

(ii) このばあいに中和を適用するのは妥当である．ただし，(2) (iii) や (b) (ii) において中和の結果 /はり音/ と ゆ/るみ音/ または /l̪/ と /ɭ/ 以外の音素が生じたとはわれわれには思えない．そこに生じた音素は /はり音/ と /ゆるみ音/ または /l̪/ と /ɭ/ の融合した音素でなければならない．従ってその表記法も /$^{p}_{b}$/ (= /p+b/) か /ɡk/ (=/g+k/) か /td/ (= t+d/); または /L/ (= /l̪+*l*/)[8] でなければならない．さらに当該言語の音素の数をかぞえる時はこれら融合した音素を計算に入れてはならないし，また当然のことながら音素目録中にその成員として位置を占める権利はない．この点において Robe, 1956 の理論は筆者のそれとわずかに異っている．(p. 32 を見よ)

中和を回避することにかけては，Hockett, 1942 はたいへん極端である．以下に彼の意見を引用する．

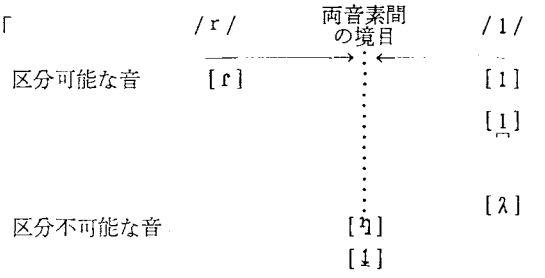
「もう一つの可能性を説明するために我々は実例がないので一例を考案せねばならない．ある言語では /i/ と /e/ とが /n/ の前を除くすべての環境で対立するものとする．ただし /n/ の前では，/i/ と /e/ とのちょうど中間に当り，他の環境では決して現われない母音が現われる．この母音は硬口蓋調音という示差的特徴を /i/ と /e/ とともに共有している．しかし中間的舌の高さという特徴は他のいかなる音素とも共有していない．もしこれらの記述がこれに関係ある事実をすべて含むとするならば，この中間的母音（そのたいへん限られた分布にも拘らず）は一つの独立した音素を構成する．」(RIL, p. 101 a, b, 脚註 11)

筆者は Hockett ほど極端にはとうていなれない．このばあいには中和の結果としての /ḗ/ (= /i+e/) という融合した中間的音素を立てることにする．しかしまた，強勢音節では e/o という対立するペアを持つが無強勢音節で単に [ə] のみをもつような体系（これは Bazell, 1956 の p. 28 にあがっている例である）でその無強勢音節に原音素 /E/ または /O/ を立てる人ほど恣意的になりたくはないものである．われわれとしてはこの [ə] を /e/ と解釈したい．こうすると /o/ が無強勢音節に現われないことになるけれども，この言語では強勢が音素論的に関係があることを利用して /é/ = [e], /e/ = [ə] とするのである．ただし [ə] が現われる位置に [e] と [o] との真の中間音 [ø] が現われるというのであれば，話はおのずから異って来る．

いずれにせよこの中和の第一のばあいにおいては音声学的理由と同型性の圧力とが，一音声現象を中和と解釈するための動機よりも強力であるばあいには，われわれは中和よりも不完全分布を選ぶことにする．われわれの中和の要件は融合音素が，対立の両項のあいだの真に中間的な音として現われることである．

第一のばあいの最後に，スペイン語の一方言における中和の典型的一例を提示しておく．

Zamora, 1960 によるとパナマ以外でもグラナダの教養ある人々の言語や中南米のその他の地域でもこの現象は聞かれるという（またそれは事実である）が，ここでは Robe, 1956 の例を借用することにする．



23.0. /r/ と /l/ の対立の解消は図の下部，[ɳ] と [ɻ] が現われている部分において明らかである．[ɳ] はすでに設定された /n/ という音素論上の類と音声的類似性を有しているのに，[ɻ] の方はそう簡単にいかない．[l] がかった [ɾ̇] とか [ɾ] がかった [l] と記述できるのなら，この音を /r/ か /l/ のいずれかに帰せしめられるであろう．ところが [ɻ] の観察から得られた音声学的検査の結果はそういう記述を許すほど明瞭ではない．つまりそういったいずれかへのニュアンスは予想できる環境に現われないし，また多くの例に直面して人間の耳はいずれであるかを識別できはしない．従って [ɻ] を [r] か [l] のいずれかに帰せしめるとすれば，それはたいへん恣意的な行為である．[ɻ] は音節末および連接または休止の前における /r/ と /l/ との中和を示しているから，歯茎または歯のはじき音 [ɾ] に始まり，側面音の継続音的性質を伴った異音 [ɻ] をもつ原音素 /ɻ/ を立てることがここでは適当のように思われる．」(p. 53)

この Robe の解釈にわれわれも賛成する．しかし前記（p. ○ を見よ）の理由によって彼にどうしても賛成できない点が一つある，それはパナマのいなかのスペイン語の音素の数をかぞえる際に Robe が音素目録の中に音素 [ɻ] を別扱いながらいちおう含めていることである．

「10.0. パナマのいなかのスペイン語は 17 の子音音素を有している．すなわち /b/, /d/, /g/, /p/, /t/, /k/, /f/, /s/, /x/, /r/, /r̄/, /l/, /c/, /m/, /n/, /ñ/, /y/, それに原音素 /ɻ/ である．」(p. 41)

[第二のばあい] 原音素の代表が対立する両項の一方の実現に等しく，代表の選択が外部的条件しだいであるとき．これは，中和され得る対立の中和が隣接音素に依存するばあいにしか起らない．隣接音素と「類似の」，またはそれと「同類の」，またはそれと「同一で」さえあるような対立の一項が原音素の代表となる．

(i) 無声と有声の（またははり音とゆるみ音の）噪音が同じ調音法の噪音の前で中和される多くの言語においては，有声の（ゆるみ音の）噪音の前では有声の噪音しか現われず，無声のはり音の）噪音の前では無声の噪音しか現われない．

(ii) ロシヤ語では口蓋化子音と非口蓋化子音との対立が非口蓋化歯音の前で中和され，その位置には非口蓋化子音しか現われない．

《筆者の論評》

(i) 一般にこのばあいには一音素しか必要とされない．たとえば [-pt-] と [-bd-] だけが与えられているならば，理論的には音素論的解釈は /-pt-/ と /-pd-/ となる．しかし実際には常に他の多くの要因がからまる，つまり当該音素体系全体およびその同型性を常に考慮に入れねばならないことを筆者は強調したい．その意味でこの例はあまりに抽象的で架空の例である．

(ii) これらのデータのみが与えられていてわれわれにその音素論的解釈が要求されるならばこの例を不完全分布の一例とみなすことは簡単である．しかし中和の第一のばあいの (i) およびその他の例がこれに加わる——実際にはこの方がずっとあり得ることだが——と，事態は紛糾して来る．

スペイン語における具体的実際的な一例を考えてみよう．それは音節末における /m/, /n/, /ñ/ の分布のことである．この問題に関してはいろいろな意見が出ている．

I. 「**いったん音素ときめたら常にそうである.**」という命題の擁護者たち．

a, Jones, 1950.

「私はある音素論学者が，音素というものは [ŋ] が英語の [iŋk] では音素 /n/ に，また [siŋ] では独立した音素に帰せられるように定義されねばならないというのを聞いたことがある．私見ではこうすることによって音素論のすべての理論がぶちこわしになるように思われる．なぜならばもし [ŋ] が [iŋk] において /n/ に，[siŋ] においては /ŋ/ に帰せられるとすると，[m] もまた同等の権利を行使して [læmp] においては /n/ の異音，[hæm] においては /m/ の異音として分類されることになるだろうから．はたまたわれわれも同様の権利を行使してドンデン返しを行ない，[læmp] の [m] と [end] の [n] を /ŋ/ と解釈することだってできるだろう[9]．さらに同じ原則にのっとって [stænd] や [boks] の [s] の位置に [z] が現われないからといってこれらの [s] を /z/ と解釈することだってできるだろう[10]．同様にしてフランス語で anecdote [ɑnɛgdɔt] の [g] は，このように発音する人々の発話では [d] の前に [k] は現われないという理由で /k/ と解釈されねばならないと主張することだってできる[11]．私はこういった可能性を実現せしめるような音素の定義を発明する

ことは不可能だと思う.」(p. 98, 脚註 1)

b. Silva-Fuenzalida, 1952—1953.

「8.2. 子音 (子音音素どうしの交代)

1. /p, b, f, m/ の前での /n/—/m/

pan pasable /pampasáble/

pan bueno /pambuéno/

pan fermentado /pamfermentado/

pan malo /pammalo/」(p. 168).

c. Stockwell, Bowen & Silva-Fuenzalida, 1956.

「1. 42.2. すべての方言において /p/, /b/, /f/ といった唇子音の前で形態音素論に許される唯一の鼻子音音素は /m/ である. 次の一連のデータは上記のものと同種の同化傾向を示すもので, ただ下記のものは形態音素論のレベルである点が異っている.

/múybyén ↓ /	['muiˌ'ßjen#]
/múybyém|bámos ↓ /	['muiˌ'ßjem = 'bamɔs]
/múybyém ↓ bámos ↓ /	['muiˌ'ßjem#'bamɔs#]
/múybyén ↓ bámos ↓ /	['muiˌ'ßjen#…'bamɔs #]」 (RIL. p. 410 a)

d. Robe, 1956.

「25.0. /m/ は有声・両唇・鼻子音の類に属する. 語頭, 母音の前, /p/, /b/, /f/ の前に現われる. [m] と [ɱ] という二つの異音を持っている.

25.1. 母音または両唇子音の前では /m/ は有声・両唇・鼻子音として実現する: manta ['mam̪ta], totuma [to'tuma], lomo ['lomo], un peso [ṵm'peso], un bulto [ṵm'bṵl̪to], convento [kɔm'bem̪to], sin brazos [sɨm'bɾasɔh], compadre [kɔm'paðɾe]」(p. 54.)

「27.1. /ñ/ は舌が硬口蓋と広く接触する有声・硬口蓋・鼻子音である. La Peña [la'peɲa, pestaña [peh'taɲa]. 後続する硬口蓋子音は /c/ か /j/ である. ancho ['aɲt͡ʃo], la chinche [lɑ't͡ʃɨɲt͡ʃe], panchillo [paɲ't͡ʃiʝo], un llano [un'ʞano]」[12] (p. 56.)

e. Hill, 1958 (註 1) に引用した Hill の文章の続き)

「音声的類似の規準による作業の数例を出せばこのことが明らかになるだろう.

/n/ と /ŋ/ とが別々の音素として立てられたと仮定しよう. そうすると一つの鼻子音とそれに直続する /k/ から成る音列では, 一つの異音しか現われないという意味で /n/ と /ŋ/ との区別は不可能であることがわかる. 綴りはどうであろうと, ink, sink, think といった音列はあるものは /n/ に属し, また他のものは /ŋ/ に属するような音を含んではいな

い．いかなる対立も不可能であるという事実にも拘らず，アメリカの言語学者たちは /k/ の前に現われる音を /n/ または他の独立の音素に帰さないで，/ŋ/ に属せしめることに何らの疑念をもさしはさまない．同音は他の音素に対してよりもずっとよく sing の /ŋ/ に似ており，こういったばあいに独立の音素を立てることは分析を少なからず複雑にするものである．」(p. 52.)

「例: /rêd+ìŋk+stêynd+péypərz/」(p. 182.)

f. Cárdenas, 1960.

「ancho /añco/」(p. 33.)

II. 中和の信奉者たち

a. Alarcos, 1961.

「116. 音節末で中和される鼻子音音素や側面音音素の諸対立は後続の子音の音声的性質によってその音声的実現が条件づけられているという共通の特徴を示している．音声表記はわれわれに多数の異音の存在を教えてくれる．cambio は両唇・鼻子音を，confuso は唇歯・鼻子音を，concierto は歯間・鼻子音を，santo は歯・鼻子音を，cansado は歯茎・鼻子音を，concha は硬口蓋・鼻子音を，cinco は軟口蓋・鼻子音を；alza は歯間・側面音を，alta は歯・側面音を，alba は歯茎・側面音を，colcha は硬口蓋・側面音をそれぞれ有している．原音素 N (= m/n/ñ) と L (= l/ʎ) はこの位置で音素としての価値をもつ唯一のものであって，後続の子音の調音点に従って変わる調音点の変化は無関係である．たとえば concha という語にあっては硬口蓋・鼻子音音素 /ñ/ ではなく，絶対的な鼻子音音素，すなわち原音素 /N/ が現前しているのである．上記諸例の音素表記の次のようである: /kaN-bio/, /koNfúso/, /koNθiéRto/, /saNto/, /kaNsado/, /kaNca/, /θíNko/; /aLθa/, /aLta/, /aLba/, /KóLca.」(p. 175—176.)

b. Malmberg, 1963.

「スペイン語は音節末での子音のバライティーが多くない．その音素体系は /m/, /n/, /ñ/ の三つの鼻子音音素を有しているが，これらは音節始めでのみお互い対立する（従って母音間で．ここではいかなる子音も自動的に外破音となる）．音節末では対立がなく，そこに現われる鼻子音の「調音点」はもしあるとすれば次に来る子音によって自動的に決定される．もし子音も何もあとに続くものがなければ歯音か軟口蓋音かのいずれか（これは文体上の差または地方差によって決定される）である．かくして un beso [ṵmˈbeso], un día [un̪ˈ-ˈdia], un chico [ṵɲˈt͡ʃiko], un gato [ṵŋ ˈɡato], jamón [xaˈmɔn] または [xaˈmɔŋ] となる．音素論的にはこれらすべてのばあいに原音素 /N/ を認めるべきである．従って「調音点」は無関係となる．つまり余剰の典型的例である．次に来る子音の性質は鼻子音によって

予想でき，それ以上の情報は何も与えない.」(p. 133)

「第 65 表

	[m] + [b, p, m]	un beso
	[ɱ] + [f]	un fósforo
	[n̪] + [θ]	un ciego
/-N/	[n̪] + [t, d]	un tonto
	[n] + [s, n, l, r]	un señor
	[ɲ] + [t͡ʃ, ʎ]	un llano
	[ŋ] + [k, g]	un gato」 (p. 134.)

III. 不完全分布の支持者 A. Alonso, 1945.

A. Alonso, 1944 の中心テーマは下記の通りである．スペイン語のすべての相関的子音はその固有の性質を失わずに，音節始めでは示差的であるある特徴を音節末において失う．そしてこの事実を証明すべく， A. Alonso は八つの例を出している．ここではその中から関係ある二つだけを取出して引用することにする．

「(i) 鼻子音——音節末には常に事実上調音点，それも後続子音の調音点が認められる．音声学的にかくも多様な変種があるにも拘らず，我々は同一の記号 n，同一の語の中における同一の音素構成要素を認める．調音点は発話のメカニックの上で必要なだけであって，意図的に用いられないので，音素の音素論的性質を変えることなく好きなだけ機械的に変えることができる.」(p. 241—242.)

「(ii) 側面音——音節始めではたらく [l] と [ʎ] との対立は音節末では機能しない．種々の調音点が新しい対立を生むために使われることなく，単に有声の呼気の鼻むろにおける共鳴のみを実体とする音節末鼻子音について起ると同様に，音節末側面音についても同じことが起る．つまりその実体は有声の呼気の舌の側面との摩擦からのみ成っている．調音点はもはや意図的構成の中に入らず，単なる発音上のメカニックにとどまる．また colcha や el llanto の l が音声学的にたとえ [ʎ] (音節末に現われるすべての子音と同様内破音) であろうと，音素論的には l のままであり，その性質は言語学的カンの上では l の性質と対応するものである．それは表記の影響によるからではなく，第一に (多くのばあい) 実際の発話においてまず各語 (el llavero) の性質が感じ取られ，次に種々に結合しあった音素の各構成要素の性質が感じ取られるからであり，また第二に，われわれの音声体系が [-ʎ] をもたず，他の硬口蓋音についても同様だからである．たとえば doncella に対し doncel, desdeñar に対して desdén, doña に対して don, millar に対して mil, pellejo に対して

piel, calle に対して cal, valle に対して val, ella に対して él といったふうに.」(p. 243—244.)

このようにして音節末に現われる鼻子音と側面音についての三つの主要な音素論的解釈を列挙し了えた. 結論だけに関する限り, 筆者は III. A. Alonso, 1945 に賛意を表する. ただし彼の論法は,「意図的」,「音声映像」,「実現の意図」,「言語学的意識」などの用語を用いており, 多分に心理主義的である. われわれは過度の心理主義を捨てることにする. われわれの論法は次の如くである.

(i) 相補的分布と音声的類似

前記Malmberg, 1963 の第 65 表では音節末の鼻子音は後続の子音の調音点によって変化している (しかもこの現象は音声学的に説明できる[13]). それは [b, p, m] の前では [m] として, [f] の前では [ɱ] として, [θ] の前では [n̪] として, [t, d] の前では [n̪] として, [n, s, l, r] の前では [n] として, [t͡ʃ, ʎ] の前では [ɲ] として, [k, g] の前では [ŋ] として現われる. つまりこれらの音はお互い相補的分布をなしている. その上一音素に帰せられるに十分なだけの音声的類似をそなえている. 従って /n/ と解釈しても不合理ではないだろう. これをふつうの相補的分布, すなわち統合的相補分布に対して系合的相補分布と呼ぶこともできよう. /n/ を構成している異音の中で /n/ に近いものが /m/ や /ñ/ に近いものよりずっと優勢であるから, /m/ や /ñ/ にではなく, /n/ に帰せられることも当然である.

(ii) 休止の前に現われる異音との同型性.

休止の前には [m] も [ŋ] 現われない. Alarcos, 1961 は次のように述べている.

「休止の前, つまり文末では当然のことながら同じタイプの音節末での中和が起る. この位置では /m/ も /ñ/ も /ʎ/ も現われない. ここでは中和の音声的実現は不変で, 常に /n/ と /l/ である. álbum, máximum は [ˈalßu̯n], [ˈmɑʎsimu̯n] と発音される. カタラン語をカスティリヤ語風に発音しても同様に, Sabadell [saßaˈɛðl][14] である]. (p. 176.)

このようにして音節末に現われる異音と絶対末尾に現われる異音とのあいだの親密な関係を尊重することは不合理ではない.

(iii) このばあいと音素どうしの自由交代とのちがい.

/ka_po/ という環境では [n] は決して現われない. /kó_ca/ においても同様である. このようにこのばあいは音素どうしの自由交代とはちがうのである. このことからわれわれは音節末に現われ, あとに子音の来るような諸鼻子音を単一の音素に属せしめることにした. Contreras & Saporta, 1960 が行なっているテストはこの意味で興味深い. (20) と (21) のペアに注目しよう.

(20) [ˈfamga]—]ˈfaŋga]

(21)　['fanga]—['faŋga]

この二つのペアについて彼らは一音が二音素のいずれにも帰せられ得る一種の中和を示したものだという．つまり，[ŋ] は [m] や [n] と相補的分布の関係にあるのである．

まったく同じことが側面音についてもいえる．

けっきょく Alarcos, 1961 が出している諸例（p. 26 を見よ）に対するわれわれの音素表記は次の如くである．/kanbyo/, /konfúso/, /konθyé$\underset{r}{\overset{r}{}}$to/, /santo/, /kansado/, /kónɔa/, /θínko/, /alθa/, /alta/, /alba/, /kólca/[15]．いいかえれば．この中和の第二のばあいはわれわれによって不完全分布のばあいと解釈されたことになる．ある環境にある音が現われないということはその音が属する音素の分布が記述される時にちょっと触れさえすればよい．このばあいに中和を適用するとむしろ事実を不明確にするだけである．

[第三のばあい]　これは原音素を示すための対立の一項の選択が内部的条件によるばあいである．

(a)（このばあいの）中和の位置で容認される対立のすべての項は当該音素体系の見地からして無特徴であり，反対の項が有特徴である．従って中和され得る対立が論理的に独自的の時にしかこれは起らない．

(b)　もし中和され得る対立が独自的でなく，段階的（たとえば母音の相異る開口程度間の対立とか音の高さの相異る段階間の対立）であれば，中和の位置に現われる項が常に極項を占めている．

(i)　ブルガリヤ語や近代ギリシヤ方言では u と o, i と e の対立が無強勢音節で中和され，より閉じた方の母音（またはむしろより開いていない方の母音）u が i が中和の位置での該当原音素を示すのに役立つ．

(ii)　ロシヤ語では o と a の対立が無強勢音節で中和され，より開いた方の母音（またはより閉じていない方の母音）a が強勢音節直前の音節において該当原音素を示す．

(iii)　ランバ語（北ローデシヤのバントゥー語）では低い音色と中位の音色のあいだの対立が末尾で中和され，中和の位置つまり末尾では低い音色のみが現われる．

《筆者の論評》

不完全分布が最も効力を示すのがこのばあいである．我々の解決法を以下に示そう．

(i)　ブルガリヤ語や近代ギリシヤ方言では無強勢音節に /o/ と /e/ は現われない．

(ii)　ロシヤ語では /o/ は無強勢音節に現われない．

(iii)　ランバ語では中位の音色は末尾に現われない．

[第四のばあい]　対立する両項が共に原音素を代表する，すなわち中和が起る A 環境では B 音素が，別の中和が起る C 環境では D 音素が現われるばあいである．論理的には，対立する両項のいずれも原音素を代表しないという第一のばあいの正反対である．この第四のばあいが純粋な形で現われることは稀である．たいていのばあいそれは第二のばあいと第三のばあいとの結合した形である．たとえば，

(i)　日本語では口蓋化した子音と口蓋化しない子音との対立が e と i の前で中和され，i の前では口蓋化した子音が，e の前では口蓋化しない子音が原音素を代表する．

(ii)　ドイツ語では ss と sch の対立は子音の前で中和され，原音素は語根の始めの位置で sch によって代表され，語根内または同末尾では ss によって代表される．

《筆者の論評》

このばあいも不完全分布によってすっきりと解決される．

(i)　日本語の諸音節の音素体系が示す美しい音節目録を見られたい．これについては原，1963, p. 14 を参照のこと．

(ii)　ドイツ語では語根の始めの位置に /s/ が現われず，/ʃ/ は語根内および同末尾に現われない．

スペイン語の r/r の対立もこの第四のばあいに属する．第五のばあいを論じる際これについても詳述することにする．

Trubetzkoy が提示している中和の四つのばあいの検討はこれで終ることになる．ところが，彼は第五のばあいがあるのを見逃していたのである．このばあいは Martinet, 1936 に出ている．彼の中和の分類は次の如くである．

「二音素 /α/ と /α′/ が中和されると，その音声的実現の形は次の四種である．

1.　ある位置では [α] として，他の位置では [α′] として (Trubetzkoy の第四のばあい)

2.　常に [α] のみ，または常に [α′] のみ (Trubetzkoy の第二と第三のばあい)

3.　[α] としてでも [α′] としてでもどちらでもよい．

4.　第三の音 [α″] として (Trubetzkoy の第一のばあい).」(p. 55.)

[第五のばあい]

Martinet, 1936 の第三のばあいに相当し，筆者のいう音素どうしの自由交代である（音どうしでも異音どうしでもない）．

(A)　無声音と有声音

ここでわれわれが強調したい第一のことは「個人語か単一方言か？」の問題が音素どうしの自由交代と大いに関係があるということである．われわれが個人語だけに注目するならば，音

素どうしの自由交代は一般にたいへんわずかしか起らず[16]，不完全分布によって解決される．このことを実例によって明らかにしよう．まず Contreras & Saporta, 1960 を引用する．

「もしインフォーマントがたとえば ['boɾa]—['ßoɾa] に対すると同じく ['epti]—['eßti] に対しても音素論的に区別がないと答えるならば，われわれの文法は /-pt-/ か /-bt-/ のいずれか一方を生み出せばよい．」(p. 8—9.)

しかしいったんある方言を分析の対象として選び出したのなら，音素どうしの自由交代の数はぐんと増す．たとえば A. Alonso, 1945 は次のようにいう．

「有声一無声の対立は音素論的価値をもつのは音節始めだけである： gasa と casa, falda と falta, temblar と templar. 音節末ではこの対立は音素論的機能を失い，有声性は現実には否応なしにあったりなかったりするが，もはやそれは記号の意図の中には入らず，同一の音素論的記号の発効の単なるバリアントとして，音素の認定のためには何らの障害もなく現われたり，現われなかったりする．俗語も方言も考慮しない正しい発音では inepcia とも inebcia とも，cápsula とも，cábsula とも，adopción とも adobción とも，obtener とも optenerとも， subterráneo とも supterráneo とも，obsesión とも opsesión とも，absurdo とも apsurdo とも発音される．atlas とも adlas とも，ritmo とも ridmo とも，atmósfera とも admósfera とも，adquirir とも atquirir とも，adjetivo とも atjetivo とも発音される．aktor とも agtor とも，frak とも frag とも，téknica とも tégnica とも，acción とも agción とも，eksigir とも egsigir とも，mágsima とも máksima ともいわれる．」(p. 246.)

いずれにせよ，われわれの解釈は自由交代に基いている．いま引用したばかりの A. Alonso, 1945 の p. 246 の諸例を使って，われわれの音素表記を示そう．

/iné$^{p}_{b}$θya/, /ka$^{p}_{b}$sula/, /ado$^{p}_{b}$θyón/, /o$^{p}_{b}$tené$^{r}_{ř}$/, /su$^{p}_{b}$teřaneo/, /o$^{p}_{b}$sesyón/, /a$^{p}_{b}$sú$^{r}_{ř}$do/;

/á$^{t}_{d}$las/, /ří$^{t}_{d}$mo/, /a$^{t}_{d}$mósfera/, /a$^{t}_{d}$kirí$^{r}_{ř}$/, /a$^{t}_{d}$xetíbo/;

/a$^{k}_{g}$tó$^{r}_{ř}$/, /fra$^{k}_{g}$/, /té$^{k}_{g}$nika/, /a$^{k}_{g}$θyón/, /e$^{k}_{g}$sixí$^{r}_{ř}$/, /má$^{k}_{g}$sima/.

本論文ではカスティリャ方言を分析の対象として取上げたので，音素どうしの自由交代の例が多くなり，当然のことながらこのような表記になった．われわれの表記はあまりに複雑なように見える，しかし言語事実を忠実に正確に記述するためにはわれわれの表記以上に適当な方法はないと堅く信ずる．/b d g/ が /p t k/ の上に位置してもいっこうにかまわない，しかし実をいうと統計的に出現頻度の高い音素を上に置く方がのぞましいだろう．

単一の個人語の音素体系を記述する時には不完全分布にしかならないから上のように垂直に

並べられている二つの音素のうち一つを落すことができることも附記しておく.

(B) さて「中和」概念の頑迷な信奉者をこの上なく悩ませる均等対立に移ろう. これは本論文の pp. 16-17 に列記されている. 下にそれらに対する我々の音素表記を示そう.

(i) /f/—/s/ : /na$^{f}_{s}$talína/

(ii) /d/—/θ/ : /a$^{d}_{\theta}$be$^{r}_{\bar{r}}$tí$^{r}_{\bar{r}}$/, /a$^{d}_{\theta}$mirá$^{r}_{\bar{r}}$/[17]

(iii) /k/—/θ/ : /a$^{k}_{\theta}$to/, /ré$^{k}_{\theta}$to/

(iv) /g/—/θ/ : /i$^{g}_{\theta}$norá$^{r}_{\bar{r}}$/

(v) /r/—/s/ : /e$^{s}_{r}$θéso/, /e$^{s}_{r}$θéna/, /a$^{s}_{r}$θénso/, /lo$^{s}_{r}$dédos/, /lo$^{s}_{r}$dyéntes/[18]

(vi) /b/—/n/ : /su$^{b}_{n}$maríno/, /su$^{b}_{n}$múltiple/

(vii) /k/—/g/—/w/: /do$^{k}_{g}$$_{w}$tó$^{r}_{\bar{r}}$/

/b/—/w/: /o$^{b}_{w}$xéto/

/p/—/w/: /ka$^{p}_{w}$sula/

(viii) /d/—/y/ : /pa$^{d}_{y}$re/

/r/—/y/ : /pó$^{r}_{y}$ke/

(C) 音節末における /r/ と /r̄/ の自由交代

/r/ と /r̄/ の分布は次の通りである. 形態素のはじめには /r̄/ が現われ, 母音間では /r/ と /r̄/ 両方が現われて対立し, 音節末では両音素が自由交代する. この事実は A. Alonso, 1945 によって彼独特の心理主義的論法で記述されている.

「‥‥単せん動と多せん動の対立は音節始めでだけ音素論的機能をもつ. 音節末では実際上一つまたはそれ以上のふるえがなければならないが, この音声的事実は, 意図的交代としてはたらくわけではないからわれわれの考慮外にある.」(p. 243.)

われわれは彼の心理主義には賛意を表しがたいが /r/ と /r̄/ の自由交代を認めるという彼の結論には賛成である. Alarcos, 1961 がやっているように音節末に原音素 /R/ を立てることはしない. また中和や抹消や原音素をどのように採用してもそれは何の益もなく事実を複雑にするだけという Hockett, 1942 (RIL p. 101 b) ほどわれわれは極端ではない.

今やわれわれにとって合点のいかない [r̄] と [r] に関する他の二つの音素表記について語らねばならない.

(A) /r-/ と /-r/

(i) Prieto, 1955.

「しかしながら /r/—/r̄/ という対立は二つの音節核のあいだでのみ，すなわち内破子音と外破子音との対立が示差的であるのと同じ位置においてのみ示差的であることをわれわれは指摘したい．

母音間の位置にのみ限定された対立のばあいには（そしてスペイン語は内破音や外破音が問題とならないところで，われわれの知っている限り唯一の例を提示しているが），音節のの位置を示差的とみなすことができ，問題となっている音を，音節の境い目の位置に従って境い目お互い排除し合う同一音素の異音どうしと考えることができる．かくしてスペイン語の [ɾ] と [r] は一つの音素 /r/ の異音どうしと考えて caro と carro のちがいを音節の境い目の位置のちがいに帰することができる：/kar-o/ と /ka-ro/.」(p. 104).

《筆者の論評》

率直にいって Prieto のいうことは理解できない．caro と carro の音節の切れ目は ['ka|-ɾo] と ['ka|ro] である．その上これは単せん動音素と多せん動音素間のちがいである．

(ii) Saporta & Contreras, 1962.

「もう一つの /y/ のために /-/ という記号を導入することはそれ自体何ら有益ではない．しかしこの方法によって /w/ と /r̄/ を省くことができるのである．/u/ と /w/ の対立も同様に，連鎖の導出に関係のある境い目を指摘することによって説明される．すなわち [de'sweʎo] desuello 対 [dezw̆e'saɾ] に対しては /de-sue/ 対 /des-ue/ というふうに．単音節語では [r] は冒頭に現われ，[ɾ] は他の位置に現われる．母音間では双方とも現われる：pero ['peɾo] 対 perro ['pɛrɔ]．これらの対立は pero を /pér-o/, perro を /pé-ro/ と書き表わすことによって説明される．同様に，

['rɛi̯] rey /réi/

['sɛɾ] ser /sér/

['peɾo] pero /pér-o/

['pɛrɔ] perro /pé-ro/」(p. 29.)

《筆者の論評》

この説より大なる恣意性はない．/-/ という記号は一方で音節の境い目を示しながら，他方で /r/ と /r̄/ のちがいを示すことがいかにして可能であろうか？

(B) /r/ と /rr/

(i) Silva-Fuenzalida, 1952—53.

「‥‥ /rr/ を構成する異音の継続時間は二モーラ[19]であり，/r/ の異音はその継続時間が一モーラである．」(p. 161, 脚註 22)

《筆者の論評》

もっと先で (p. 34) 紹介する Jones, 1950 の反論を見られたい.

(ii) Stockwell, Bowen & Fuenzalida, 1956

「あるばあいには単一音素 /r/ と解釈される多せん動音はここでは主として形態音素論的理由によって /rr/ というグループ[20] として扱われる. つまり *quereré が querré となり, señor における末尾の [r] が señor está において [ɾ] と交代するからである.」(RIL, p. 407 a, b.)

《筆者の論評》

quereré といった架空の形を考える必要はない. querré は /keřé/ と解釈し, querer は /keré$^{r}_{ř}$/ と解釈すればそれでよい.

señor está における [r] と [ɾ] の交代はわれわれの解釈, つまり /señó$^{r}_{ř}$/ に対する /señórestá/ としてうまく説明できる.

(iii) Coseriu, 1962 (特に自分の音素解釈についての説明がない)

(C) /r/ と /ř/

(i) Hockett, 1942.

/ř/ は単一子音としての現われ方をするといって反論している (RIL p. 101 b).

(ii) Jones, 1950.

多せん動音も単一子音 (それを発音するには発音機構の静的位置を必要とする) の中に組入れられると述べている (p. 3).

(iii) Pottier, 1954.

「彼 (Alarcos) は二重子音の問題に触れている. スペイン語では [ɾ] は [r] と対立する. Alarcos 教授はそこに緊張のちがいを見る. はり音の [r] 対ゆるみ音の [ɾ] というふうに. スペイン語では真の重複音はわずかに r と n だけであることをわれわれは知っている. n/ñ という音素対立が立てられて, しかも n/nn という示差的結合が存在するであろうか? まず第一に銘記すべきことは日常口語では -nn- を -n- と発音する傾向があることである (cf. innocuo/inocuo‥‥). しかもたとえ -nn- が発音されるにしても, その対立は語内では起らず (なぜならば iniciar を俗っぽく *eneciar と発音する人はおそらく稀な語 enneciar を用いないであろうから), 語と語のあいだで起るのである. たとえば, innecesario lo es に y necesario lo es を対立させることができよう. しかしその示差機能はたいへん小であり, 無視した方がのぞましかろう.」(p. 112).

(iv) Alarcos, 1961.

[r] は冒頭に現われ, そこには二重子音は決して現われないと述べている (p. 157, 脚註 2)[21].

(v) Cárdenas, 1961.

[r] を /rr/ とする解釈に関して，こうすると一群の二重子音の問題が提起されよう，なぜならば二重子音はスペイン語の子音体系ではたいへん稀であるか現実には皆無だからと述べている．(p. 60, 脚註 10).

このようにいくつもの立場を比較検討してみると，けっきょく [r] を /r̄/ と解釈するのがもっとも適当と思われる．

最後に，厳密な意味では pero と perro とは最小対立を構成しないことを注記しておく．なぜならば pero は ['peɾo] であり， perro は ['pɛrɔ] だから．特に起ると予想される悪循環に注意しながら，まず [e] と [ɛ] が /e/ の異音であり，[o] と [ɔ] は /o/ の異音であることを証明すべきである．

結論を述べる．「中和」という概念が有する顕著なる欠点のいくつかを考慮して，その異質的ないくつかの用法を制限することを筆者は考えた．筆者はそこでその不適当な用法の大部分を，不完全分布，音素どうしの自由交代など他の規準によって代置することにした．かくて今や中和はわずかに Trubetzkoy の第一のばあいにのみ適用されることになったわけである．換言すれば筆者は中和を，両項の対立の中和としてではなく，単に両項の中和としてのみ考えるわけである．

[註]

1) 彼の言を引用すると次の通りである．
「しかしながら分布の基準が物理的異同に優先するのは不可避のようだ．たとえば一子音が別の子音と後続の開放連接とのあいだに分布しているばあいのように同一音の交叉をあるばあいに限って認めないわけにはいかない．Haskins 実験所の研究者たちと Stockwell，それに引続いて Jakobson によって行なわれた最近の研究にはある種の交叉の存在を，従って物理的特徴に対する分布の優先性を認めるような傾向がある．これは別に物理的基準を捨てろというのではなく，単に一公理から一作業原則へと格下げしようというだけのことである．つまり厳密な方法による音素のパターンの記述は最大限のというよりもむしろ最小限の交叉を含むべきであるということなのだ．」(p. 53)

2) Martinet, 1936 は次のように述べている．
「Truqetzkoy 王子がロシヤ語の形態体系に関する彼の論文 (TCLP II) において用いている音素表記の体系をわれわれが解釈するにはこの概念（「言語学的意識は中和された音素を，その対立が中和せられた対をなす二音素とは別個の音素とみなす」）に照らして行なわねばならないと私は思う．ここでは各音素には一記号（すなわち，一文字およびそれに附加される識別用諸記号）が，しかも一記号のみが相当するという原則が尊重されている．

その結果，たとえばロシア語においては九つの舌尖破裂音素，つまり最大の区別が行なわれる環境に現われる /t̪/, /tʲ/, /d̪/, /dʲ/ の四音素の他に，有声の対立が中和される環境に現われる二音素 /T̪/ と /Tʲ/，音色 (Eigentongegensatz) の対立が中和される環境に現われる二音素 /t/ と /d/，それに有声と音色という二関係が中和される環境に現われる音素 /T/ とがあることを認めね

ばならない．最後にあげた五つの音素のおのおのは，有声か無声か，軟口蓋か硬口蓋かの各ばあいに従って，実現の音声的性質は何であろうと残った四つの音素のどれか一つと同じである．たとえば /T/ は少なくとも理論上は，[t̪]，[tʲ]，[d]，[dʲ] というさまざまの形で音声的に実現することが可能である．上記の諸原則に基いた表記は，精密表記においてある種の識別用記号が中和の位置を表示したばあいですら，舌尖破裂音において音声的に明確な四つの音素しか区別できないであろう．

この点において人は Trubetzkoy 王子に従うことをためらい，ひいては明快な一音素の価値を全ての中和の結果に帰せしめて諸言語の音素目録を法外にふくらませることを避けるであろう．もちろんだからといってある言語の音素体系を記述しようとする時の中和の重要性を否定するわけではない．」(p. 48)

このように Martinet でさえも，中和という概念の有力な支持者でありながら，原音素設定の繁雑さを認めている．

3) Bazell はいう．

「分布上のあきまが発話の規制的原則としてはたらかないようなばあいにのみ「不完全分布」なる用語の適用を制限する方がのぞましいようだ．たとえば英語で [au̯] は唇音の前では現われないことになっている．しかしふつうの語彙に対しては有効なこの事実も，機会さえあれば当該二重母音を変形せずに Lebensraum といった形をすばやく取入れることを妨げはしない．音素化されるはずの材料からはずすことのできる語彙中の周辺的要素（たとえば固有名詞）を，この材料の音素化の際に用いられる規準から除外するような規則をおしつける理由はまったくあり得ない．」(p. 27)

4) おそらくこれは第二義的問題であろう．しかし /t/ と /k/，/f/ と /s/，/d/ と /θ/，/k/ と /θ/，/g/ と /θ/ の原音素は何と表記されるのだろうか？　おのおの /T/，/F/，/D/，/K/，/G/ であろうか？　この表記に賛成する人は誰もいないだろう．表記の立場から見ても中和の適用には不便が感ぜられる．

5) 筆者の解釈では，これは /m/ でなく /n/ でなければならない．p. 28 を見よ．

6) ここでは中和の効力の限度がよく見えすいている．このばあいは別の規準を適用した方がよさそうだ．

7) Alarcos, 1962 は次のように述べている．

「音素の不完全分布のばあいと中和とは別扱いすべきである．たとえばスペイン語に [tr-]，[dr-] はあっても，*[tl-]，*[dl-] はないという事実は /r/ と /l/ は /t/ と /d/ のあとで中和されることを意味しない．」p. 47)

たしかにその通りである．しかしそうなると不完全分布適用の範囲が不明確となる．また不完全分布と中和との関係はどうなるか？　彼の論文はこの疑問は何ら答えていない．

8) これら融合音素の義務は，両音素の中間体であることを常に示すことにある．それだからこそ筆者は /P/，/T/，/K/ といった表記を嫌うのである．これらの表記はその各々の対比音素について何も語るところがない．

9) /ŋ/ は [læ—p] という環境で [m] として，また [e_d] という環境で [n] として現われねばならない理由はまったくない．

10) (もし Liz Tailor が *[lisˈtèi̯lə]，strike zone が *[ˈstraɪ̯gˈzoʊ̯n] と発音されるならば．さらに newstower とか children's toy といった例もある．)

11) (もし technique défectueuse が*[tɛgnigdefɛktɥø : z] と発音されるのであれば)

12) この解釈から興味ある，理解し難い現象が起る．/λ/ を有するスペイン語の一方言では colcha は /kóλcɑ/ と解釈され，/λ/ をもたない (yeístaə) の方言では /kólcɑ/ と解釈される．

13) cf. Fernández Ramírez, 1950.

「これに対して，音素を音節末に置くと，その外破の瞬間が失われてしまう．その結果調音上ある程度の弛緩が起り，それらの音の調音点が多くのばあい次に来る音節始めの音素の調音点に移行し，そのばあい両者は共通であまり遠くない場所に共存することになる．たとえば [l] 音や [s] 音は歯音の前では [l̪], [s̪] という歯音的調音になる．例．alto, pasto．歯間音の前では [l] は歯間音 [l̪] となり，前硬口蓋音の前では前口蓋音 [λ] となる．例．alzar, Elche．歯間音の前の [s] も歯音である．例： ascender． そのもっぱら内破的な性格から由来する音節末音の弛緩性のために，それは次に来る音節始めの音に比して別種の音声学上の従属を受けることになる．[s] と [θ] は有声子音の前に位置すると有声化して [z], [ð] となる．例: isla, brizna. desde においては [s] はその調音点を変えた上に有声となる: [z̪]．またふるえ音の [r] の前ではその無声性を失い，その本来の調音形式と音色の性質をやや変じる．例: Israel (摩擦の [ɹ] に近くなる).」(p. 40)

14) cf. Navarro, 1959.

「86. 休止前の [m] ——スペイン語の発音は休止の前に [m] を置くことを許さず，稀な例外を除くと常に [n] 音によって代置してしまう．harem とも harén とも無差別に書かれるのはこのためである．しかしいずれのばあいも [aˈɾen] と発音され，複数は harenes である．同様にして Abraham は [aˈβɾan], máximum は [mˈaɣsimʉn], mínimum は [ˈminimʉn], ultimátum は [ʉl̪tiˈmatʉn], álbum は [ˈalβʉn] と発音される．このmのnによる代置は一呼気段落内での次に来る母音との結び付きにおいてよく感知される．álbum hispanoamericano [ˈalβunɨspanoameɾiˈkano], el ultimátum había llegado inesperadamente [elʉl̪tiˈmatunaˈβia λeˈɣaðɔi̯nespeˈɾaðamēn̪te].」(p. 88)

「110. 語末の [m] はふつう [n] と発音され，直後に来る調音の影響の下に [n] が受けると同じ変形を受ける．álbum pequeño [ˈɑlβʉmpeˈkeɲo], álbum cerrado [ˈalβʉn̪θɛˈraðo], máximum de carga [ˈmɑɣsimʉn̪deˈkaɾɣa], álbum hispanoamericano [ˈalβunɨspanoameɾiˈkano], un mínimum casi inconcebible [ˈʉ̃ᵐₙˈmīnimʉ̃ŋkɑsɨŋkɔn̪θeˈβiβle]」(pp. 112—113).

Fernández Ramírez, 1950.

「Abraham, ultimátum といった語における語末の -m も同じであって，後続の子音に従ってではあるが，[-n] と発音される．.」(p. 54).

15) cf. Zamora, 1960.

「中南米の大部分では語末の [-n] は，カスティリャ語の ['θɨŋko], ['mɑŋga] の]ŋ] と同じ軟口蓋音である．語内でも同様に軟口蓋音である．[kaŋˈbjaɾ], [ɨŋpeˈðɨɾ]．この軟口蓋音 [ŋ] はキューバ，プエルト・ルリーコ，サント・ドミンゴ，ニュー・メキシコ，グワテマーラ，ベネスエラ，ペルー，パラグワイ，ウルグワイ，アルゼンチンで記録された．この [ŋ] が典型的，代表的であるガリシヤの他でも，イベリヤ半島の多くの地方（アンダルシーヤ，エストゥレマドゥーラ，アストゥリヤス，レオン，カナリヤス）でも稀ではない．」(p. 331—332)

これらの方言においてもわれわれの解釈はいささかも変るところがない．comen /kómeŋ/, cinco /sínko/, manga /manga/; cambiar /kaŋbyaɾ̆/, impedir /iŋpedíɾ̆/, 等々．

われわれの理論はカタラン語についても有効である．

けっきょくのところこのわれわれの解釈は主として，同一音素に帰せられる可能性のある音声的実現を有する三つの鼻子音音素 /m/, /n/, /ñ/ の音節末における系合的相補分布に基づいているのであって，部分的にせよ他の言語，たとえば中南米の方言とかカタラン語の音素論においても有効である．いいかえればこの規準に普遍的なものであって，特にスペイン語の音素体系はこの規準の正当な採用をわれわれに許してくれた．しかもこれを採用することの可能な言語は少からずあるように思われるのである．

なお，われわれの音声的実体への忠誠度は音素どうしの最小の部分交叉をも認めないほど極端ではないことを附記しておく．

16) これにひきかえ Silva-Fuenzalida, 1952—53 は同一の個人語の中に音素どうしの自由交代を認めている．

「‥‥これらの音素 (/p t k/) が別の無声子音と音節の境い目越しに接し，(内部) 閉鎖連接をなして現われるような個人語では，/p t k/ は摩擦の強くない軟か摩擦音となって現われる註13)：

/#ɑpsolúto#/ [ɑβsoˈluto] absoluto.

これらの個人語では /#/ の前に [β̥] が現われる：/#xóp#/ ['xɔβ̥] Job.

(註 13) このばあい現われる [β̥] は，/p/ が /b/ と対立する際の示差的要因は声の有無であるから，/b/ の異音ではなく /p/ の異音と解釈すべきである．他方，音節の境い目越しに [ɓ] (内破の [b]) が [s] の前に現われると，この [ɓ] は /b/ に属する．このばあい同一の個人語の中に /p/ と /b/ との交代を認めることができる．他方他の個人語では [β̥] が現われるだけでこの交代は起らない．」(p. 158—159)

17) 音素論の分野では verdad の単数形が /be$\overset{r}{\underset{r}{}}$daθ/ で，複数形が /be$\overset{r}{\underset{r}{}}$dades/ であってもいっこうにかまわない．/be$\overset{r}{\underset{r}{}}$dáθ/ を /be$\overset{r}{\underset{r}{}}$dádes/ と同一と認める作業は形態論に属する．形態論において，二つの異形態素 /-aθ/ と /-ad-/ とが {-ad(-)} という同一の形態素に属するという事実が明らかにされる．

なお，/d/ と /θ/ の音節末での自由交代は Alarcos, 1961, pp. 178 と 183 の最後のパラグラフでは解決されていない．

18) おそらく /r̄/ の現われる可能性をも考慮せねばなるまい．

[s] はふるえ音の [r] の前でその無声音的性格を失って，その調音法と音色の性質をやや変えると一般には信じられている．例：Isræl (摩擦の [ɹ] に最も近くなる)．Fernández Ramírez, 1950, p. 39 や Navarro, 1959, pp. 108—109 はこのようにいっている．A. Alonso, 1945 はこの点に関しては他のばあいに比べてずっと心理主義的である．

「‥‥，[ɹ-] の前の [-s] はその対立の性格を失い，話者の言語意識の中で [s] 本来の性質を失うことなしに次の [r-] に (摩擦の [-ɹ] としてまたはじき音の [-ɾ] として) 同化される；los reyes, lorr̄eyes または lor̄eyes; dos reales, dorr̄eales または dor̄eales.」(p. 245)

しかしながら，一般に las rayas は (tú) la rayas (la はたとえば palabra, rayas<rayar) と同じに発音され，両方とも音素論的には /lar̄áyas/ と発音される．音素論的分析のなし得ることはこれ以上でもなければこれ以下でもない．他のことは形態論が解決してくれるであろう．

19) §1. 2. 註において Silva-Fuenzalida, 1952—53 が述べているところによると，/rr/ は /r/ が二つ重なったものでなく，独立した音素だという．

20) それに引換えこれら三人の言語学者は /rr/ は /r/ がダブったものとしている．従って §0. 4. で彼らが提示しているスペイン語の分節音素の目録に現われていないのである．

21) むしろスペイン語の音素体系にとっては二重子音はしっくりしないというべきであろう．

参 考 書 目

Alarcos, E.: Fonología Española³. Madrid (1961).

———— : Problèmes de Phonologie Romane. ACTE DU COLLOQUE INTERNATIONAL DE CIVILISATIONS, LITTERATURES ET LANGUES ROMANES. Commission Nationale Roumaine pour UNESCO (1962).

Alonso, A.: Nota sobre una Ley Fonológica del Español. REVISTA DE FILOLOGIA HISPANICA 6.280—283 (1944) ‥‥Estudios Lingüísticos: Temas Españoles 253—258.

——— : Una Ley Fonológica del Español. HISPANIC REVIEW 13.91—101 (1945) ···· Estudios Lingüísticos: Temas Españoles 237—249.

Bazell, C. E.: Three Conceptions of Phonological Neutralization. FOR ROMAN JAKOBSON. 25—30 (1956).

Beym, R.: Porteño /s/ and [h] [ɦ] [s] [x[[ϕ] as Variants. LINGUA 12.199—204 (1963).

Bloch, B.: Phonemic Overlapping. AMERICAN SPEECH 17.273—284 (1941) ····RIL 93—96.

——— : Studies in Colloquial Japanese IV: Phonemics. LANGUAGE 26.86—125 (1950)···· RIL 329—348.

Cárdenas, D. N.: Introducción a una Comparación Fonológica del Español y del Inglés. Washington D. C. (1960).

Contreras, H & Saporta, S.: The Validation of a Phonological Grammar. LINGUA 9.1—15 (1960).

Coseriu, E.: Forma y Sustancia en los Sonidos del Lenguaje. REVISTA DE LA FACULTAD DE HUMANIDADES Y CIENCIAS 12.143—217 (1954)····Teoría del Lenguaje y Lingüística General. Madrid (1962) 115—234.

Eernández Ramírez, S.: Gramática Española. Madrid (1950).

Fischer-Jørgensen, E.: Remarques sur les Principes de l'Analyse Phonémique. TRAVAUX DU CERCLE LINGUISTIQUE DE COPENHAGUE 5.214—234 (1949).

Halle, M.: Why and How Do We Study the Sounds of Speech? GEORGETOWN UNIVERSITY MONOGRAPH SERIES 7.73—80 (1954).

Hara, M.: Actualidad y Orientación para la Enseñanza de Español en Japón. PONENCIA PRESENTADA AL CONGRESO DE INSTITUCIONES HISPANICAS. Madrid (1963)···· Presente y Futuro de la Lengua Española 2.356—372 (1964).

Hattori, S.: On'inron (Fonología) I. KOKUGOGAKU (FILOLOGIA JAPONESA) 22.88—104 (1955).

——— : Onseigaku[5] (Fonética). Tokio (1956).

Hill, A.: Introduction to Linguistic Structures. New York (1958).

Hockett, C. F.: A System of Descriptive Phonology. LANGUAGE 18.1—21 (1942)····RIL 97—107.

Jakobson, R., Fant, C. G. M. & Halle, M.: Preliminarias to Speech Analysis. Boston (1952).

Jakobson, R. & Halle, M.: Fundamentals of Language. La Haya (1956).

Jones, D.: The Phoneme: Its Nature and Use. Cambridge (1950).

Kenyon, J. S.: American Pronunciation[9]. Ann Arbor (1946).

Malmberg, B.,: Structural Linguistics and Human Communication. Berlin (1963).

Martinet, A.: Neutralisation et Archiphonème. TRAVAUX DU CERCLE LINGUISTIQUE DE PRAGUE 6.46—57 (1936).

,: Reseña de Alarcos, Fonología Española[2]. WORD 11.112—117 (1955).

Pottier, B.: Reseña de Alarcos, Fonología Española[2] BULLETIN DE LA SOCIETE DE LINGUISTIQUE DE PARIS 50.111—114 (1954).

Prieto, L. J.: Reseña a Alarcos, Fonología Española[2]. STUDIA LINGUISTICA 9.102—105 (1955).

Robe, S. L.: The Spanish of Rural Panama····Major Dialectal Features. Berkeley & Los Angeles (1960).

Saporta, S. & Contreras, H.: A Phonological Grammer of Spanish. Seattle (1962).

Silva-Fuenzalida, I.: Estudio Fonológico del Español de Chile. BOLETIN DE FILILOGIA 7.153—176 (1952—53).

Stockwell, R. P., Bowen, J. D. & Silva-Fuenzalida, I.: Spanish Juncture and Intonation. LANGUAGE 32.641—665 (1956)····RIL 406—418-

Tanaka, H.: Multiple Complementation or Neutralization? ST. PAUL'S REVIEW OF ARTS & SCIENCES (DEPT. OF GENERAL EDUCATION) ARTS & LETTERS 8.59—71 (1960).

Trnka, B.: On Some Problems of Neutralization. Omagiu lui Iorgu Iordan. 861—866 (1958).

Trubetzkoy, N. S.: Grundzüge der Phonologie. TRAVAUX DU CERCLE LINGUISTIQUE DE PRAGUE Tomo 7 (1939).

Zamora, A.: Dialectología Española. Madrid (1960).

On Neutralization

Makoto Hara

1. We always respect phonetic reality, but we are not so extremist as to ignore a minimum of partial phonemic overlapping. So we don't agree to the thesis that "to an identical phonetic segment must be put an identical phonemic interpretation wherever it occurs" or "once a phoneme, always so is it".

2. Bazell, 1956 contradicts the five objections made against the concept "neutralization", but he doesn't succeed in the contradiction, as we have seen, concerning the fourth and fifth ones.

We believe that in the concept of "neutralization" are included too many elements to be comprehended in a single category. It is better to diminish the extension of its uses substituting

other methods for them whenever the substitution seems adequate to us and whenever we are sure that in this manner another much better solution is obtained. We never intend to remove the use of neutralization, because we sometimes cannot solve problems by any other method.

On the basis of this conclusion we have revised Trubetzkoy's five cases of neutralization and substituted other criteria such as defective distribution, free alternation of phonemes, etc. for the inadequate uses of neutralization. And we now apply neutralization only to Trubetzkoy's first case.

3. *Campo* is interpreted as /kánpo/. This interpretation is based on (a) the rules of paradigmatic complementary distribution and of phonetic analogy, (b) pattern congruity with the allophone which occurs in the absolute final position (a common phenomenon which occurs in syllabic distension), (c) difference from the free alternation of phonemes.

But our interpretation may not be universally valid. Only the phonemic system of the Spanish permitted us to adopt it, although we believe that there will be some languages for which it is possible to adopt it.